

の状文にも。伊左衛門内よりとかいても人のとがめぬこと。  
 わたしにうらみが有ならばこな様にもうらみが有。去年  
 のくれから丸一年二年こしに音づれなく。それのいくせの  
 物あんじそれ故に此病。やせをとろへが目に見へぬか。煎  
 薬とねり薬と針とあんまでやうくと。命つないでたまさ  
 かにあふてこなさにあまようと。思ふ所をさかさまなこり  
 やむごらしいとふぞいの。わしが心かいつたらふんで斗を  
 かんすかたいて斗をかんすか。是しにかつてある夕霧  
 じゃ。笑ひがほ見せて下んせおがんです。エ、心づよいどう  
 よくなくやとひさに引よせて。たいつさすつこゑを  
 あげ涙。みだれてかみほどけわけも。しやうねもなかりけ  
 り。伊左衛門も涙にくれ。あやまつた外にさしてうら

幾瀬 \*  
 こなき こなさんに同じ。  
 あまえる っはいがられてわが  
 ままをいふ。  
 おがんです 拜みますの訛。  
 どうよく むごきこと。非道。  
 髪ほどけといへば わけは髪を  
 髻にかけたるにや。

我物づら 我物顔に同じ。わが  
 所有物の如く取扱ふ面持。  
 四十八枚願の願云々 紙子の  
 四十八枚といふ語を願の四十  
 八願に通はせて。つぎは平等施  
 一切とつづけたるにて。用し器  
 も腰のまはりもつぎだらけなり  
 との意。願の四十八願は、  
 無二惡趣、不更惡趣、悉皆金色、  
 無有好醜、宿命智通、天眼智通、  
 天智通、他心智通、神足智通、  
 漏盡智通、必至滅度、光明無量、  
 壽命無量、聲聞、數、眷屬長壽、  
 不聞惡名、諸佛香嗟、念佛往生、  
 阿耨現前、係念定生、具生二相、  
 必至補處、供養諸佛、供具如意、  
 說一切智、得金剛、萬物離淨、  
 日遊揚、得辨才智、智辯無窮、  
 國土照、國土影、福光榮、  
 開名得志、女人成佛、開名梵行、  
 人天致敬、衣服隨念、常受快樂、  
 見佛土、開名具根、開名得定、  
 開名尊貴、開名具足、開名見佛、  
 隨意開法、開名不退、得三法、  
 たらす 欺さします。

みいなければ共。命にかへぬ大じの女房おくざしきのわかい  
 者。我ものづらがむつとして思ひぬ腹立こらへてたも。我  
 とともうき身の躰誠の正躰見たまへと。小袖くるりとぬぎ  
 ければはだにあのせのやれ紙子。四十八枚みだの願。つぎ  
 の平等施一切どうふるうこそあわれなれ。伊左衛門涙をお  
 さへ。詞扱かのせがれの無事で里にあることか。なんとし  
 たぞといひければ。されば其子を里にやりしと申せしとい  
 つり。まっならぬお身の上くらうにさせますきのどく  
 さ。地かの阿波の大じん平岡左近といふ人と。わしとが中  
 の子といひかけてぬりつけて見たれば。詞人のおろかなま  
 んまとたらされ受取て。腹のかり物武士の種とてうあい  
 あふと聞につけ。地身のうき時の色々のこいちも出る

腹は借物 但官集覽「妾のうへに云(跡道)あまの原かり物なれや望の月」

つき立 もりたてに同じ。  
おとまし \*  
おとまし 倚りともいふ。ことごとく縮まること。

つきだしびんの下ッうがい 髪を突出して結びたる下舞踏をいふ。女用脚置圖案、三、舞踏は下髪せし奉公人など其動じまひ内内の扇などに入つるさまは、おのがししうち寄時下髪は身持むつかしき故くるくと廻して舞にて假にしめ置たるなり其様

物と。かたりもあへぬに伊左衛門 ム、ツさもあらふこと。

詞去ながら我いにしへの手代共。其子をつき立母へせせう

し。藤屋の家を取立たいとの談合有。地どふぞわけをいふ

て取かへす。しあんがしたいと云所に。おくより内議色ち

がへなふおとましましやく。おふたりこのの咄がおくのさし

きへつ、ぬけ。お客さまいぶけうがほじきにあふていふこ

と有と。今こ、へお出なふ喜左衛門殿こちの人と。皆々この

がりひそめく所へ客の刀をひつさげ。ア、是伊左衛門殿夕

霧殿。おどろくことい少もない。是其せうことづきんをと

ればつき出しびんの下かうがい。べつかうさし櫛さしもの

すい共あきれてふしんはれやらず。詞ヲ、いかにもふしん

の立はづ。男にばけたる其間なんの其と思ひしが。をな

おもしろしとていつしが常の結びぶりになりたるなり末の世には下髪せぬきわの人柄もなべて舞踏を結ぶなり。附圖第七を見よ。  
四季ばなし(柳亭筆記所引)貞享年間の書(二の巻)出たちはつひめかぬすまづつひの女、菊から草の地なしの小袖に薄紫の中幅帯うしろむすびにゆたかに髪はかうがい曲なるほど下へもつてゆきてはれ髪の日になつほどに折つけ云々。  
おはもじ お恥しい女房詞。  
土佐駒 和訓栞「土佐の國より出る駒也果下馬也といへり」果下馬は小馬の異名なり。歴添藤藏抄「明術往來ニ馬ヲ指テ果下ノ類ト云ハ。何事ソ。果トトハ。小馬ノ異名也。其ノ長ク三尺也。仍テ是ニ乗テハ。果子低枝ノ下ヲモ過ツベシ。故ニ果下ト云ト云々」  
あられぬさま 女子としてあるまじき奇異の姿。

この姿をあらわして此中でもの申のおはもじながら。かの阿波の大じん平岡左近が本さい雪と申の我身こと。夕霧殿のかりの情つれあひの子をたん生とて。此方へ請取いへ。我がよろこぶ子。はらもいたますくらくせすうんでもらひし忝さ。あだにもせずもりそだて。手ならひよみ物弓鎧迄もきようにて。地國となりの土佐こまひかせのつたすがた。あつばれば平岡左近が世つき。七百石のぬしなりと御家中のほめものさぞ見たからふし見せたし。ひとつのあの子がみやうがのため夕霧殿を請出し。一所にともなひくらさんと。心ねも聞んためおはくろおとしつあられぬさままで。詞只今きけば我つれあひをたらし。地伊左衛門の子をつきつけたと聞よりはつとむねふさがり。おつとの武士はす

さがなし よくない。わるい。  
 不詳。  
 改易 徳川時代に士の受くる刑の名。族籍を除き家祿を召上げらる。豊后より重く切腹より輕し。  
 阿房拂 武家にて大小兩刀を藏奪して追放すること。  
 生々世々 佛教の語なり。生れかばり死にばり。現世も後世も永くの意。  
 流れの身 遊女の身といふに同じ。昔遊女は多く水邊にありて、舟に乗りて客に接せしよりの名なりといふ。

たつたエ、うらめしい夕霧。男にばけたを幸とびか、つて  
 さし通し。我もしなふと刀を取取たれ共。詞しんだ跡で  
 此雪がけいせいにりんきして。あはうじにといわれたい  
 よく男の名を出すと。とまるもとのごをおもふ故。ない  
 ことさへいふ世のさがなさ。あへの平岡左近こそ。町人の  
 子をけいせいにつきつけられたと取沙汰し。殿さまのおみ  
 なたてばよい仕合で御かいゑき。地あほうばらひか切腹  
 かし、ても悪名きえばこそ。此所を了簡しあの子を其ま、  
 下されば。侍ひとりの取立生々世々のお情ぞや。我人我子  
 の大じのものことに思ふ人の子を。思ひぬ人の子といふの  
 何しに心よからふぞ。それいなかれの身のつらさ。侍の妻  
 には又此様なうきこと有。詞をなご生れし此のんぐの女

女御 周禮によりて立てたる名稱にて、天子の御寢に侍する女官をいふ。周禮、天官、女御掌、御教子王之燕寝、以二歳時一獻、功事と  
 更衣 後宮の女官の稱。天子の御衣を更ふことを司る。又御寢に侍す。位は女御の下。わりなし。あまりに甚しの意。

御更衣になるとても。うら山しうの思ひぬと地心の底をく  
 ときたて。涙わりなき物語。夕霧ふうふ吉田屋の一家袖を  
 ぞぬらしける。詞伊左衛門つと出ハ、ア賢女哉貞女かな。  
 左近殿との夕霧故いこんのあれ共それわたくし。拙者も  
 かのせがれを力に。出世の望みござれ共。武家のお名に  
 かへられずしんずると云迄もなし。いぜん夕霧が申通。左  
 近殿の御子息伊左衛門が子でござらぬ。ア、忝い夕霧殿  
 もそふじやぞや。はてぬしのがてんの上からわたくしが  
 なとの申されぬ。地去ながら命の内。ちよつと見せて下さ  
 んせと涙にむせぶぞ道理なる。ヲ、心得たく。萬事むね  
 にこめました身請のことも吉田屋と。ちかくに談合しま  
 せふあの子が成人するに付。伊左衛門殿もたのしみサアけ

さいんざ もとは擬聲語にて、  
 小唄の句などにもあれど、後に  
 は宴席にて唄ひうする意に用  
 たり。狂言、茶づけ「さいん  
 ざはま松の音はさいんざ。あ、  
 いかうようた事かな。」同、ほ  
 うし物ぐるい「同上」  
 若黨 年若き耶蘇。  
 中間 古くは侍と小者との中間  
 のものないへど、後世には、し  
 もへの中の頭立ちたる者ないへ  
 り。

口なきこより云々 「奥きッん  
 より口なきけ」といふ語を遂に  
 「口なきこより奥なきけ」として  
 これを奥鏡云々に轉じたるな  
 り。諺の意は、人の心の奥を聞く  
 とも語るものにあらずれば、  
 それを聞く人より其言ふところ  
 を聞け。とつく口に漏るるもの  
 なりの意。

中之卷

い約のかための盃。いよ／＼あの子のこつちの子平岡左近  
 が惣領。さらり／＼と手をうつてくるわでさ／＼んざめつら  
 し。日も暮かゝれば若たう中間かこつらせ。阿波の且  
 那のお迎ひ。地是下人も忍ぶ此姿。もとの男となりふりつ  
 くり。頭巾大小印ろうきんちやくてい主さらば。夕霧こ  
 とのおつ付是よりびんぎせふ。萬事頼む地うげこみました  
 と。ひさをかゞめるこしかゞめる。こし本つれるをひさか  
 へて。おろせがをくる大もんや。口をきこよりおくさまの  
 ふかき。なさげや 三重たちかへる

昔の京 仁徳天皇都を難波に置  
 かせられたるよりいふ。  
 まり男 忠實なる男。  
 門の飾 日次紀事「倭俗正月門  
 前左右各懸三松一株竹一竿」上  
 横竹兩竿、其外面掛三具布果實  
 等物、名稱「門松」蓋孟春之月紀  
 月之義乎」

天神とやらの神明 西天満の神  
 明宮をいふ。祭神、天照大神。  
 えはう参 年の始にその年のあ  
 きの方の神社に参詣すること。  
 蕪方を見よ。  
 天満の神明宮は大阪の東北、寛

夕霧阿波鳴渡

春や延寶。六年と明わたる世もむかしの京。難波のけさの  
 めづらしき妻子引くし舊冬より。上本町の道場を玄關がま  
 へかりざしき。お國の御用あら玉のこゝにとしとるまめ男。  
 阿波の國平岡左近と宿札も。門のかざりに時めきて武家の  
 きら有春なれや。表の物見に女中のこゑ／＼申おくさま。  
 めづらしい大坂の正月を。はじめて見物致しお國へ歸つて  
 よいはなし。是もおかけと悦ぶにぞ。調ヲ、／＼そち達が  
 云通。主のおかけの忝い。御用について左近殿我々つれて  
 わづか逗留の旅やとへけさから礼者のたへぬこと。地皆殿  
 さまの御威光。左近殿の源之介つれて。天満とやらの神  
 明さまへえ方参。地おやの子としてしほらしい六ツや七ツで  
 馬にのる。追付近殿の名代御奉公つとめるを。見るて有

卯の間にあり。延寶六年は戊午  
 なければ恵方巳午の間に方るべく  
 して干支に合せず。此作の興行  
 ありしは永七年は庚寅なれば其  
 年に合せたるものなるべし。恵  
 方を見よ。\*

すつ／＼素鎧 前供の歩くさま  
 の形容すつ／＼を素鎧につづけ  
 たるなり。素鎧は十字字槍、鎌  
 槍などに對する稱にて、又の直  
 なる普通の槍をいふ。

のつし鬘斗目 馬のあるく様を  
 形容したる「のつし」のつしを鬘  
 斗目につづけたるなり。鬘斗目  
 は、練絲を經に、生絲を緯にし  
 て織れる絹布にて、腰のあたり  
 にのみ縞を織出したるものな  
 いふ。賀服はこれにてつくる。  
 明けて七ツの云々 此年越して  
 漸く七ツの幼き兒の、まだ乳香  
 まう饅頭ほしといへき身にて云  
 云といふべきを饅頭形の中刺に  
 つづけたるなり。うなぬ松は稚  
 松、小松といふに同じ。  
 親は太夫かひ云々 親は太夫を

ふとお悦の所へ。且那のお歸りさき供はしる黒羽織。すつ  
 く素鎧くりげの馬。のつしのしめにあさ上下親につづい  
 て源之介。あけて七ツのちのまふまんぢうなりの中ぞり  
 も。めもとかしこさうない松千世をいばゆる土佐駒に。手  
 綱かいくくりしやんくく。くつわの音のはり、んく。り  
 んとすはりしはかまこし物見の前を乗廻せば。是々源之  
 介もどりやつたかめてたいく。地さぞ馬上がさむからふ  
 おとなしいでかしかつたと。まねかれて源之介申か、さま。  
 調え方參に天満へよつて。是かふてきましたと。土人形の  
 天神手綱に持そへ。私が是もつてゐるのを道とをりが見付  
 て。とつさまを見しつてゐるやら。親の太夫かひ子の天神  
 がふと云て笑ひました。地おれにも大きな太夫かふて下さ

買ひ、子は一段下の天神(太夫  
 の次に位する遊女。\*)を買ふ  
 とのうがら。  
 あどなし あどけなしに同じ。  
 めまぜ 眼つきで知らせるこ  
 と。めくばせ。  
 いたいけ 小兒のいとけなく、  
 かはゆきさまをいふ。

御屋敷役 藏屋敷の役人。藏屋  
 敷とは、徳川時代に諸藩主また  
 は幕府旗下の土の大阪に所有せ  
 し邸宅をいふ。領地の産物を販  
 賣せし所にして、領主より定詰  
 または一年交替にて役人を置け  
 り。この役人を留守居役といふ。  
 大事な \*

お乳 お乳の人の略。貴人の子  
 に乳を與へ、また乳なくとも、

れと。あどなき詞にこし本共きのどくがり。是しるくくと  
 めまぜすれば源之介。調え方參に天満へよつて。是かふてきましたと。土人形の  
 ぶ調法な。侍の乗馬の是此様にはいく。地はいくく  
 と親の心もしらあのかませ。門内へ乗入しふりいたいけに  
 おとなし。今の詞にこし本衆口をとちておくさまの。きげ  
 んをうかゞふ體なれば。是々源の咄を聞たか。道通りが  
 左近殿を太夫かひと云たげな。此前大坂おやしき役の時。  
 新町がよひに夕霧と云太夫になじみをかけ。源之介をまふ  
 けたの定てみなも聞つらん。人の見しるもことわり大名高  
 家も母かたのぎんみいなし。大じないとい云ながら。地あ  
 の子が心の此雪をうみの母と思ふてゐる。必々夕霧が子と  
 云噂さんぜいぞや。其夕霧をも請出しあの子がお乳にをく

その兒の養育掛をする女。

けいせん けいせいの説。  
ばしやれ者 ばさらものに同じ。風俗華奢にして、物事にしまりなきものをいふ。伴信友いふ「華奢のまゝに奇麗な心に盡して、衣服の色合模様などの定らず美しきを、法師言致折羅と云へるより出てたる言なるべし」折羅は梵語なり、金剛と譯す。太平記三十五「夫政道の爲におだなるものは、無禮不忠邪欲巧誇大酒遊宴。折羅傾城雙六云々。」  
今のこと いんまのこと。  
にやこい もろい。女に甘き意。小じたたるい したたるいを一層強めていへる語。ものいひがてれししたるをいふ。  
うつそり 迂闊に。ぼんやり。はな明る はながあくに同じ。あてがはづれる。失望する。小むやくしい 無益しいを一層

はづ。傍輩なみにあしらやと仰もはてぬにこし本中口々に。  
詞ア、おくさまのあんまりけつかう過ました。我々がなんほさたをいたさず共。あのけいせんのばしやれ者それをいはずにゐませふか。地お袋ぶつてはな高ふお家をありたいまゝにして。おくさまをふみつけるの今のこと。詞まだそれ斗か下地がにやこい且那さま。小じたるふしかけたらぼつかりとくひついで。田もやらふあせもやらふで。おくさまのうつそり地はな明てしまひんしよ。小むやくしいあたぶのわるい。こりや御無用に遊ばせとたきつけらるゝ女心。詞ア、いへばそふじやおれのいかいあほうじや。いのりものけたい戀のかたきもつてゐてあてがふ。ぬす人にぐらの番磁石に針。地皆に氣を付られてはやもやく

強めていへる語。やくにもたぬといふに同じ。  
あたぶのわるい 〇。あなたは嫌思の意をもつ接頭語。ぶのわるいは、割がわるい、ましてやくにあはぬなどいふに同じ。  
たきつける おだてる。そそのかす。  
いのりものけたい 祈殺しもしたい。  
盗人に磁の番磁石に針 盗人に磁の番はよき手引の針。磁石に針はよく吸ひつくの意にてこれもよき手引の針。近松の道語にや。  
法界悋氣 \* 十文字の道具。十文字の槍。(道具持たも見よ。)\*  
藏屋敷 (御屋敷役を見よ。)\*  
物まう もの申すの略。人の家に行きて案内を乞ふ時の詞。たどれい 物まうに應ずる詞。たれ(雌)の轉サといふ。

とはらが立。後にくやみの出るのちやう請出すことをやめにやらふ。皆でかいたよふいふてくれた。詞扱の彌やめになされますか。はてやめにせいでなんとせふ。ア、氣がさつはりと成ました。おりん殿よいきみか。わしやつかへがおりました。おしゆん殿のなんと。こちやかねひろふたり嬉しいと。地身に徳もなきほうかいりんき是ぞ女のならひなる。あれ北から十文字の道具。お藏やしきの小栗軍兵衛さま年頭のお礼。御一門の中でもあなたのかたいそりやくと。物見のすたれをろす間にはや立關に物まう。詞とれい小栗軍兵衛御慶申す。地且那幸宿に有いざお通りと云ければ。軍兵衛立關に立て是家來共。詞お用について左近殿と申合すること有。しばらく隙が入べきぞ。やしきへ歸

八ツ時分 今の午後二時頃。  
 ない しもへが應諾の意を表す  
 に用ひし語。はいに同じ。  
 挾箱 和漢三才圖會「按挾箱近  
 代之制也古者用板二枚一置衣  
 服ノ上下一以竹挾之令僕擔  
 之名挾竹一自慶長年中一始以  
 箱挿棒今擔之名挾箱一平  
 士及庶人用一箇一高官者令  
 二人雙行一對一對挾箱一相傳  
 慶長中秀吉公僕名一布施久内  
 者始作出之」  
 遊遊矢覽等には異説あり。  
 道具持 槍持。槍を道具といふ  
 ことは、秋草「古代の武士は弓  
 矢を以て働し故武士を弓矢取と  
 いひしなり信長秀吉の頃より専  
 ら槍を以て働き一箱槍を以て武  
 功の最上とする事になりし故槍  
 を稱して道具といふことになり  
 て一りその出行にも身をはな  
 たず槍をもたずる事になりたる  
 也云々」(遊遊矢覽所引)

つて八ツ時分迎ひにこい。ない。其中少はやくこい來。  
 地ゆだんするなと入れれば。わかとう始さうり取はさみ箱  
 皆々宿所へ歸りしが。道具持の槌右衛門。ひとり残つてだ  
 い所のぞき。誰ぞ頼みませふ。めしたきの竹よび出して  
 下されと。いふ所へ馬取の角介にがいかほして。槌右衛  
 門わりや見ごと武家に奉公するかやい。此角介がわづかな  
 切米の内五百五十と云ぜねをとりかへた。冬とし一言のこ  
 とはりもせず。今も先身にあひたいといふべい所。竹をよ  
 びだしくれとのぶとい者だ。地ぜねのすむ迄是を取と槌  
 の柄にすがり付。まて角介槌持が槌をとられて。槌右衛  
 門が首がない。五百や六百でうる首じやないならぬ。ヤア取  
 て見せふとせりあふ最中。竹はしり出ッ角介殿道理じや。

馬取 馬の口取。  
 切米 扶持米を金錢に切替へ渡  
 すことをいふ。  
 せね せにの訛。  
 冬とし 前年の暮。  
 八軒屋 もとの京橋三丁目四  
 丁目八今の京橋三丁目の異名。  
 八軒の旅舎ありしよりの名とい  
 ふ。  
 鏡 かがみもちをいふ。  
 めぐる 浪花方言「目黒 小ま  
 ぐる魚なり」  
 すへる 正しくはするなり。  
 鏡の註を見よ。  
 藤の棚 山區谷筋筋、藤の棚觀  
 音のある所  
 鐘は鳴られ共云々 昔時槍持の  
 奴は、主人の供をして往來する  
 際、槍を振りしものにて、手代  
 りの者に槍を渡さんとする時な  
 どには、「まっつせ」ないの合  
 詞をいけ合せ、十分に振りて其  
 はづみにて投げ送れば、手代り  
 の者は、槍の頭を振りて獨樂の  
 如く廻りながら、中を飛んで來

錢の竹がすますかんにんして下され。エ、情なのしやうわ  
 る男めや。せけんを見てはちをしりやお小人町の久六の。  
 こなたなたよりわかい人八けん屋のかめとたつた一年念比し  
 て。小錢ためてやと持て。冬としも鶴が橋のおばへ。大  
 きな鏡にめぐろそへてすへられた。藤の棚のねち兵衛の  
 こなた程鏡のふらね共。おはらひのねり衆御番がりり人の  
 きに入やと入れて。まじやう者とい入れた故片町のふりを  
 内へよび入。師走にひろめが有たぞや。是でこそ女房の  
 肩かたもいかるのいの。こなたといひかへして明けて四年。  
 給分一文身につけず皆こなたに入あげる。地それになんじ  
 やよい年して。長屋へびくにん引入日がくれるとはませ  
 り。また其上にいなりあたりのうら屋小路をのぞき廻り。

ろを受取りしものなり。此振方の巧拙によりて切米に多少の差ありき。  
又、神社の祭禮の練にも、この槍を振ることもありしなり。  
御被の練衆 三津八幡の夏祭を難波のお被といふ。其夏祭の練衆なるべし。  
まじやう者 正直者。賈直なる者。  
かたもいかる 肩身が廣いといふに同じ。  
給分 給金に同じ。  
びくにん 比丘尼の訛。好物訓 聚圓葉「比丘尼(丸女)いつのころよりか齒は水晶をあざむき眉ほそく鬘を引くろい帽子もおもはくらくかつき加賀笠にばらの雪踏小歌をよすがにしてくはんくむといふしほの目もとにわけをほのめかせ云々」好色一代女、三「比丘尼は、大かた淺黄の木綿布子に、龍門の中幅帯まへむすびにして黒羽二重のあたみがくし、深江のおせぎしの加賀笠、うれたびはかぬといふ事なし、細のふたのすそみじかく、とりなりひとつに拵へ文蓋に入しは熊野の牛王酢貝耳かしましき四ッ竹、小比丘尼に定りての一升びしやく勸進といふ聲も引きらす、ばやり節をうたひ、それに氣を取、外より見るもかまはず元ふれに乘移り分立て後、百つなきの錢を袂へなげ入けるもおかし」附圖第四を見よ。 ●はませり 惣嫁を弄ぶをいふ。惣嫁はおほむれ川岸(大阪にては濱とい

あげくに此比の夜見せ狂ひも付たげな。わしとても木竹じやなしりんきもしたいはらも立。エ、にくいとん思へ共。  
詞ア、そうじやない。をなごに生れたるんぐのじや。男のさがをあらひすまいとずいぶんわしが身をつめ。三度つける油も一度つけ。せきたはくをさうりにしさうりはくをはだしてしまひ。なべかまのすみかくにもこなたのひげに入と思ひ。よい所をのけてをく我身のことにもとゆひ一筋かぬぬ。男を大じにかける故じやないかいの。女房にめぐらうをさせようが余つて色狂ひ。聞へぬ人じやとしめなきにうらみくどくぞふびんなる。

ふ)の納屋の陰あたりに出没したり。 ●稻荷あたりの云々 慈大阪城の南、玉造稻荷社のおたりをいふ。元禄寶水の頃、藤の棚觀音より此社のおたりの裏屋小路に隠屋といふものありて、殊に賤しき賣女ありしなり。好色一代女などにも見ゆ。 ●夜見世狂ひ 原の夜見世に行きて遊女に狂ふをいふ。應通の意。 ●さか ぶくなく持前。 ●鑷の墨云々 當時槍持の奴などは、面體をいっめしくせんとて、墨にてくろくろとかきひげしたるものなり。 ●しめなき しほり泣きの類にて聲を立てず泣くことによ。

御内衆 お内の人々。

鳥目百疋 錢一貫文をいふ。塵添塵抄「錢ヲ鳥目、鵝眼ト云ハ何ノ謂ゾ。鳥目鵝眼皆亮ナシ下皆料足ノ異名也。鳥ノ目ハ圓キ故ニ爾云。鳥ノ大小同ク目ノ圓ナル様ニ、錢モ其異レドモ、其形共ニ圓キガ故也云々。」奇異雜談集「料足を十疋廿疋といふいはれハ、犬追物の時、河原者、犬を百疋はなてば一貫文とる。五十疋なれば五百文とるなり。犬一疋は十錢に當る。故に十錢を一疋といひ、百文を十疋といへり。是犬追物より出た

是ここの御奉公へ中途に參つてなじみひなし。お國迄も御内衆が悪名たてるが悲しい。此うのばりのあいせをぬぐ。  
角介殿是ですまして下されと。地おびをとかんとする所へおこし本のりんはしり出。是々竹。詞そなたの心底おくさま物見よりお聞なされ。扱々きとくな。上々迄も女たる身の鏡とことなふおかんじなさる。おくさまにも少おきのすまぬことあれ共。地そなたを手本にお心がをさまつてお嬉しさ。師匠共思召御ほうびに。此鳥目百疋下さる。詞扱角介は慮外な。よその大じのお道具に手をかけるらうぜき千万。重て此こといひ出さば且那樣へ仰られ。うち首にな



る詞なり。(古事類苑所引)  
貞丈雜記には北條高時犬一疋の  
代りに錢十文つづ出さしめしに  
始るよし見えたれど、東鑑延應  
二年の條にすでに何疋ともし  
たれば信じ難し。

狼籍 \*  
ぶつてうづら 心の不平をあら  
はす願つき。また、愛敬のない  
おほつき。

冥加もない 「冥加なし」に  
きて「冥加ない」となり、更に「冥  
加がない」「冥加もない」などと  
用ゐるに至りしなり。冥加の  
意。

たとへの縁云々 男は縁百貫と  
いふ縁を百疋に轉したるにて、  
竹が縁にならんとして、奥様よ  
り下されたる百疋をすぐに男に  
遣るを縁持にひひつけたるな  
り。

子の日根から云々 古へ正月  
の初の子の日に、人々野に出て  
て、小松を探りて千代を祝へり。  
これを松を引くといひたるよ

さる、との御意じやといへば。地<sup>頭</sup>あたま角介<sup>佛</sup>ぶつてうづら。  
竹の悦び<sup>冥</sup>ア、み<sup>加</sup>やうがもない有がたい。とかくお礼のよい  
様にといた<sup>戴</sup>ゞきく。詞是榎右衛門殿<sup>持</sup>もつていなつしや  
れ。地何を見こみに此様にかいひひぞと。たとへのはだか百  
疋を。すぐに男に鎗持に過たる。妻が<sup>三</sup>やさしさと人の  
情に。夕霧が思ひもよらぬ此春の。子の日を根から根引の  
松にかゝる。藤屋の伊左衛門我子<sup>願</sup>のかほの見まほしく。な  
らぬかこのかたはなをかくれて忍ぶほうかぶり。夕霧も  
すだれこし子を見る<sup>今日</sup>けふの嬉しさより。おつとにわ<sup>夫</sup>かる、  
物うさ<sup>妻</sup>へ上本町にぞ着にける。詞宿札を見て喜左衛門。と  
なたぞ女中方頼みませふ。ハツどれからぞとこしもと出れ  
ば。私ハ九軒町吉田屋喜左衛門と申者。おくさまよりお頼

り、頭籠を用ゐて、子の日を根  
から根引(身請)の松(太夫)とつ  
づけたるなり。太夫を松といひ、  
松の位ともふは、秦始皇帝が  
松に太夫の位をおくりたる故事  
による。謡曲、老松に「さて松を  
太夫といふ事は、秦の始皇の御  
狩の時。天候にかき曇り。大雨  
しきりに降りしかば。帝雨をし  
のがんと小松の陰により給ふ。  
此松俄に大木となり。枝を垂れ  
葉をならべ。木の間すきまをふ  
さきて。其雨をもちさざりしか  
ば。帝大夫といふ爵を贈りたま  
ひしより。松を太夫と申すな  
り。」と見えたと、御狩の時  
の事にあらず。泰山封禪の時  
の事なり。史記始皇本紀二十八年  
の條にあり。

みなされし扇屋夕霧身請のこと。隨分とかけ廻り金子ハ當  
月一はいに。お渡しなさる、約束でるいやおふと首尾なり。  
只今はへ同道。地扱々<sup>せう</sup>節季<sup>せう</sup>のいそがしい中私のはたらき。  
春の用意正月のお客のせんさく。錢かねの請拂をしつめて  
の節分。大豆で打出す鬼の首とつた様にぞ申ける。詞成ほ  
どおくさまにも其お噂。扱ハあれがけいせん殿かとかごを  
のぞいて。地ハウアウけいせん<sup>傾</sup>と云もの始て見たやつはり常  
のをなごじ<sup>女子</sup>やと。はしり<sup>走</sup>入ておくさまく。詞けいせんが  
参りました。ヤア<sup>姦</sup>かしましい皆物見から聞てゐた。けいせ  
い<sup>歴</sup>いふまいぞ。今よりハ源之介のおちの人。侍町人の  
れき<sup>歴</sup>くにつきあふて。心も至り目はつかしい。地<sup>地</sup>そさう  
してわら<sup>笑</sup>われな盃の用意せよと。ひそめくこゑに左近<sup>隣</sup>かつ

ふ。  
正月のお客 費用の多くかかる  
正月買をする客。  
鬼の首とつた様 異常の大手柄  
なしたる様。  
心も至り目はつかしい 物の遊  
理にもよく通じ、動作舉動にも  
落度おひめなどはなしの意。  
氣の通つた女房 粹な女房。

色代 會釋に同じ。人に禮をす  
る。

手へ入ければ。調是なふかねて申せし夕霧のこと。吉田屋  
の喜左衛門が埒明つれだちきたとのあん内。地なんと此雪  
が様なりんきせぬ。氣の通つた女房のござんすまいがとわ  
らひるれば。ッ、御きどくく去ながら。さしきにかたい  
軍兵がゐらるゝ今内へのよばれまい。表にをいても目にた  
つ。どふかこふかとしあんなかば。門前に喜左衛門ア、  
いかふつめたい。夕ぎりさまの御病後早ふ内へ入まし。火  
に成共あてましたい。頼みませふくと地よばるるこゑ  
わかたう中間ばらくと。小栗軍兵衛迎ひの者と。やつこ  
のこゑあげ屋のこゑ。やり手なくなてけいせいに鐘待まじ  
りやかましし。地や、日もたけて軍兵衛おいとま申と立出  
る。左近おやこをくつて出色代あれば軍兵衛。調ア、源之介

永日 年の始に、三四月頃の日  
の水きころをさしいふ。春永に  
同じ。

若い者の下に「」を入れて見る。べ  
し。  
まけまじきの下に「」ものを入れ  
て見るべし。

他事なし 何げなし。

殿おとなしうござるよ。追付殿の御用に立めされふ。随分  
弓馬のけいこせい出し申そふぞ。地永日くとチクリいと  
まこひして歸りけり。地左近おや子立關に立やすらひて  
見送る體。伊左衛門はるかに見て。あれの我子かむかしの  
伊左衛門ならば。人の子になさふか大小こそさ、せず共。  
あまたの手代わかい者若旦那とかしつかせ。京大坂の町人  
の誰にかいおとるべき。侍とてもまけまじき母おやのかこ  
をて、がかき。我子の門にはひつくばふ我親にそむきたる。  
其罰ひつしと思ひしり。くやみ涙にほうかぶりの手のこ  
ひ。ひたす斗なり。おくがたもはし近く。なふく喜左衛  
門か。其かこ是へと他事なきふぜいそれを力に夕霧の。かこ  
も思ひももれ出て平さまお久しうござんす。おく様のおじ

のらさんさい のらはなまげも  
のらさんさいは禮にならばの粗  
略者。  
わ二様 \*

悲 みにてあのお子のおうばに。つげらるゝはづながらのらぞ  
んざいのわたしが身。氣色もしか／＼はかどらねど先わこ  
様を見たさにと。つく／＼と打守り。詞あれ喜左衛門様扱も  
けたかいよいお子や。聞及びしよりおとなしさま常ていの  
者の子が。七ツや八ツてかふ有ふか。地人のすぢめがはづか  
しいさすがとゝさまのお子程有。とゝ様のお心がさこそと  
推量せらるゝと。表の方へめをくばれば伊左衛門も首のば  
し。たましひぬけてみどり子の袖に。とび入ばかりなり。左近  
夫 婦 ふうふのきもつかずサア喜左衛門。詞先少成共金子渡そふ  
いざざしきへ。是源之介。あの人のわがみのうばなじみを  
かけていとしがり。此かゝも同前に。おとなになつてもう  
ばの見捨ぬ物じやぞや。地 吉田屋こちへとにこやかに

慮外者 無禮者。

あこぎ 食りて、厭くことを知  
らぬをいふ。同じ事をたびたび  
するより出でたる語。古今六帖、  
四「あふことをあこぎの島に引  
綱のたびかさならば人も知りな  
ん」阿漕は伊勢、阿漕津郡にあ  
り。

打つれ ざしきに入にけり。夕霧あたりを見廻しなふなつ  
かしやさつきにから。だき付たふてならなんだと。すがりつ  
いて泣ければ伊左衛門もはしり入。思はずしらすやれか  
いの者やと。だき付所を源之介飛のき。詞やいかこかきめ。  
むさいなりで侍にだき付慮外者めと。わき指に手をかくる  
ア／＼申まつひら／＼御めんなりませ。私が悴にちやうと  
お前程ながござれ共。ちいさい時から人手に渡し。見たい  
／＼と存る折ふし。地お前を見付とふもこたへられず。心  
みだれて慮外の段御免遊ばし。あこぎな申ことなれど。お  
侍のおじひに。とゝかといふて私にだき付て下されませと。  
ひたひを疊にすり付て手を合せてぞ泣るたる。なんののを  
れをとゝといふおりやとつ様にいふてこふと。かけ入所

訴訟 願の意。

南無三寶 \*  
参合 てあふ。

を夕霧だきとめ是申。うばがはじめの御そせう頼上ると  
泣ければ。調うばのいやることならいふてやらふ。と、様  
なふとだき付を。地ヲ、忝いと、じやくと嬉しなき。夕霧  
もうら山敷ついでにわたしもかといふて下されかし。  
調ヲ、いふてやらふ是にか、様。地ヲ、わしが子じや是のと  
様おれが子じや。ふたりが中の思ひ子のおやこふうふの  
より合の。又今生でのかなぬとないつ笑ふつまなくに  
てうあい。こそ道理なれ。おくより左近がこゑとして。  
藤屋伊左衛門。くるとよぶこゑすなむ三ばうと逃出れば。  
つゞいて左近走り出袖をひかへて。調是いにしへ參會せし。  
阿波の大じんと異名をよばれし平岡左近。そなたにうらみ  
ひなけれ共夕霧にいふこと有。それにて聽聞いたされよと

つしる 見くびる。ためす。

かはとつきのけ涙をうかめ。子、偽りおほき遊女のならひ  
おどろくべきにあらね共。是ほど迄よふもく此左近をつ  
もりしな。此子の伊左衛門が悴と。先年し、たるやり手  
の玉が咄にて。とつくより聞付無念共口おし共心一ツにた  
へかねしが。いやくあらためて侍の身分立ず。ことに  
此子も。我々ふうふを誠の父母と思ひむつましく。ふびん  
さもます故にえんでかなとあきらめ。二世とつれそふ妻に  
も深くつゝみ。夕霧がうんだる某が實子と偽りしかば。さ  
すが女房のやさしくも夕霧が心をあわれみ。うばと名付此  
内へよび取しの皆此悴がかいさ故。それになんぞや淺ま  
しい躰にて忍び入。おやよ子よのと名乗あひ。しらぬ子に  
ちゑ付る。ヤレ。をさなくても此子のな。馬に乗續つかせ

おひさき立身たのしむ身の。悴に恥をあたへん爲か左近が  
 武士をすてん爲か。色にまよひばかつくし女共が手前もは  
 づかし。地エころらめしやせひもなや悴をかへすつれかへ  
 れ。町人の子に刀脇指無用なりと引よせて。もぎ取所へお  
 方がたのはしり出。なふ情なや此子がことい我とても。じ  
 きの咄を聞しか共しらべてのお侍の一分すたるとしあんし  
 て。もらひ切たる此子なり今返して武士が立ぬ。一寸もは  
 なさぬとだき上るを引はなし。嗣身を立名を立。一分をた  
 つるといふも子孫の爲。地實子も持ぬ此左近たがために身  
 をおしまん。一分すてるがつてんと大小もぎ取つき出す。  
 いやくたへとこなたは返しても。けいやくして子にした  
 からは此雪が返さぬ。夕霧ももどさぬと取付を引のけ。す

直の咄 さきに吉田屋にて、夕霧伊左衛門の兩人よりきいしな  
 いふ。  
 一分 \*

合點 \*

かり付を引はなしおつとをもとく見ぐるしと。おく方ひつ  
 立立關をはたと。戸さして入にけり。伊左衛門も夕霧も前  
 後にくれてとほうなく。嗣源之介なき出しコレと、様か、  
 様。おりやかごかきの子でないの。地けいせいの子  
 にのなりともないと、様の子じやいの。か、様の子じや  
 いの。こ、明てくれやい侍共。あけをれやいと泣さけび  
 立關の戸をとんくと。た、く楓のわくらにこたふる者  
 もなかりける。夕霧いきもたへくながら是源之介がてん  
 しや。眞實そなたの左近殿の子でない。母こそ夕霧  
 て、ごのそれ藤屋伊左衛門。さもしい人と思やるな江戸迄  
 もしられて。左近殿より大身の武家におやこも有ぞいの。  
 地か、故の御牢人そなたもうきめ見せまじと。左近殿の子

もどく さくらひ批難するをい  
 ぶ。

楓のわくらは云々 楓は小兒の  
 愛らしき手の意。わくらはは、  
 楓といひしより病葉(うらがれ  
 たる葉)といひて、たまさかの  
 意の、わくらは(遊遊)に付けて  
 いひしなり。  
 さもしい人 見すばらしい人。  
 あさましい人。  
 おや、 親御。

ていた

と云しが誠の親とかり親の。心いさしもちがふかや。左近殿もそなたをよにもくふの有まいが。わが身の無念一たんのはら立に。いとしいそなたを捨らる。あのとつ様や此か、は今のごとく人中で。ふまれぬ斗にはちをかき。いひさげられてもそなたをだくが嬉しい。あふが嬉しいにくしん分ケし本の子の。かふもいとしい物かいのか、が此氣色での。もふあふことなるまいとつ様のこと頼むぞや。せめて一年しつとりとひとつねふもしたそと。かきくどきしみくと眞實。つくすうき涙。源之介聞分けて。こなたが本のか、様かと、様のこなたか。けいせいでもかこかきでも本の親がいとしいと。涙まじりの笑ひがほ血の筋見へてあわれなり。ヲ、でかいたく侍とてもたつとからず。

申ても 何を申して見ても。

氣付 氣付薬。

町人とてもいやしからずとうとい物の此むね一ツ。きづかひせまい伊左衛門が妻子。うきめのさせぬ力おとすな、と。いへ共我も力なく只ばうぜんと成にけり。吉田屋喜左衛門かこかきやとひせひなし共おせうし共参りか、つて我らのめいわく。調外のことならば何とぞしあんもいたすべきが。申ても霧様は親かたが、りに。ことに病中大じのお身。地先つれ歸つて扇屋へ手わたしせねばお爲にもいか。いざめしませとかきよする。扱の二たびわかれてくるわへ歸るかや。ハアウと斗にかつはとふし。すでにいきもたへんとす伊左衛門だきおこし。吉田屋の印籠の。氣付さまくかん病しやうくしやうね付けるが。むかしよりいくたりかこふした身のうきなんき。はなしにもき、つれと是ほど

相賀籠 一つ駕籠に乗合ふこ  
と。  
おじや 正しくはおぢやにて、  
おいてあれより出てたる語。\*

百里来た道ハ百里歸る。

末期の水 死際にのむ水。

のつらいこと。かさなればかさなるかや今あふて今わかる  
。あの子をせめてあひかこでいざおじやとだきよする  
を。引はなしその喜左までめいわく。 嗣これ世にも人に  
もうらみなし。左近もいはゞ尤至極。女房がなさけといひ  
たれか親子三人にあたするものなけれども。 地おやにさ  
からひたからをついやし身をおごりたる其むくひ。あれあ  
の天道ににらまれていつくにて身のたつべきぞ。 百里きた  
道の百里歸る。むかしのゑようほどうきめを見ねばつみさ  
えず。男故のくらくとおもひ歸つてくれとなきいさめ。す  
かしのすればよいくといひたいことのかずくも。せき  
くるなみだせきくるむねいのちのうち今一ど。かほばせ  
見たいあひたいまつこの水をあの子の手から。たのむく

門々の松に云々 正月始のこと  
とて、家の門毎に立てたる松に、  
松の位といふ太夫の面影を残し  
て云々。

あいの山 問の山節の時。伊勢  
國問の山にて唱ひし俗曲の名。  
神都名勝詩、四問の山節(尾上  
坂、及浦田坂にて唱へし歌なり)  
往古僧行基の兩宮に参詣せし  
時、世人に無常を示さむとて、  
唱歌數首を綴り、比丘尼にうた  
はせしが初なり。寛文延寶の頃  
に兩問の山(尾上坂浦田坂)の路  
傍に小屋を作り、女は紗綾、縮緬  
を纏ひ、三絃を弾き、男は編笠を被り能を擗り、子兒を踊らせ錢を乞ひき。其謡ふ歌いと哀にして、文句も能く聞分けられたるよし云々。  
元禄頃は京阪地方に問の山を唱ふ物賣ありしなり。傾城反魂香には胡弓とささらを用ゐたるのみにて三味線を用ゐたること見え。此當時は  
三絃を用ゐざりしにや。 ●夕べあしたの……是がめいどの友となる」が問の山の唱歌なり。問の山の唱歌多く傳はず、傾城反魂

と夕霧の名にたちかゝる夕がすみ見をくり。見をくるかど  
くの。松に太夫がおもかけをのこして。わかれ 三重ハ歸り  
ける

### 下之卷

あいの山 夕べあしたの。かねのこゑじやくめつ。いらくとひ  
ゞけども聞てナ。おどろく人もなし合ノ手のべより。あなた  
の。友とていけちみやく。ひとつにじゆず。一れん是がめ  
いどの友となる。

香ト此夕霧阿波鳴渡とに見ゆる文句にれば當時は二三首存せしもの如し。 ●寂滅後樂 世相の無常を示し、涅槃の樂を説きし四句の偽文の句なり。四句の偽文とは、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂にして、此偽文は涅槃經に出づ。 ●野邊よりあなた

の友 黄泉の友。 ●血脈 佛祖の法脈を傳へたるしるしとして、戒師より法弟に授くるものにて、其人の死體と共に棺に納るるもめかりなきがす 目所を利がす

の義かといふ。めはしなきがすといふに同じ。 神子 當時は神子が神佛に托して、靈符によりて病を治すなどいふを信じたるなり。

七種はやす云々 日次紀事、正月七日の條「七草今日謂二人日、其腹互相賀自昨日至今朝二家

家哉湯羅無寄券等於七粘几、而以杖敲之代七種菜、而用之今日敲之謂七草。」

四枚肩 昇手の四人つげる靈籠をいふ。 おりぬの衣 靈籠よりおりぬと

つづけて下乗の心をいひたるまでにて、おりぬの衣といふものあるにあらず。此つづけ方は論曲熊野にならひしものと思はる。熊野車宿り馬留め。こころり花車。おりぬの衣はりまがた。

詞エ、物もらひでもめかりをきかしや。是程醫者の出入や

ら神子の御ふうのと。屋内がもてかやひて。 七種はやす

間もないが目に見へぬか。通りやくと云所へ梅庵御見廻

四枚がた。おりぬの衣長ばをり醫者のおくへぞ通りける。

詞 伊左衛門あみ笠かたふけ小ころに成。やれ源之介。か、

が氣色がおもそふな。 地命の内にま一と見せたたく此姿にて

きたれ共。もはや見せることも見ることも。成まいとさ、

やけば源之介。早ふあひたいことじやとて父にすがりて泣

ゐたり。 詞 梅庵様お歸りと。表へ出ればやり手杉家内の上

下ついて出。病氣のとふでござります。梅庵かぶりをふつ

しごまのち路清水の云々。 寄敷 天然の名醫の名。 扁鵲 支那の名醫の名。

初夜 戌の刻、今の午後八時。

來世金 來世の冥福を祈るために、佛に捧ぐる金といふ。是がほんの來世金といへるは、世人は後世の冥福を祈るために、來世金とて、金を佛に捧ぐるが、

今死んで行く夕霧のは、其身がすてにくらとも知れぬ金なれば、これこそ眞實の來世金といふべけれど之の輕口。

おうへ 座敷。表に對して内所をいふ。曾根崎心中「おうへに

夕霧阿波鳴渡

て。 ぎばへんじやくでも叶ぬ。物にたとへていのッひあが

つたかへらけに。 とう心一筋とほひて風吹に置様な物。け

ふの日中かをそふて初夜かきり。 もはやとくも何もかまひ

ず氣任せにしたがよい。 ア、おしい人じや。 夕霧くとい

ふて。 おやかたにいかいかねもうけてやつた女郎じや。 達

者な内に此梅庵あの人を一年もてば。 今比のさちとらいで

も樂するもの。 地あつたらかねをあの世へやる。 是がほん

の來世がねじやと。 いひすて歸れば。 扇屋一家の打しほれ

返答する者もなし。 ヲレ源之介醫者の云分聞たか。 もふ叶

へぬ思ひきれ。 ア、悲しやとふぞか、様のしなしやれぬ様

にして下されと取付。 なげくぞふびんなる。 扇屋了空ふう

ふ。 涙かた手にふとん手づからおうへにしき。 詞 今のあひ

夕霧阿波鳴渡



は亭主夫婦。上り口には料理人、大經師普磨「おまへはおうへにけつかなふとんしいて」可笑記、五「そも世中の人の心と心とを取かへたき類こそおほけれわか衆のつれながちなるに女のなきけがら、わがうさまのおうへこのみにおひめ様のおもてこのみ云々」

おしやる。仰せらるより出でたる時。  
はげかりの關。昔陸奥にありし關、後拾遺集「しるらめや身こそ人めなははかりのせきに涙はとまらざりけり」  
せきたぐる。せきあぐるに同じ。むせかへりてなくこと。  
うたふこゑにも云々。歌ふを善知鳥に通はせて、血の涙子はやすたつづけたるなり。謡曲、善知鳥「平砂に子を生みて落雁の。はなや親は隠すとすれど。うとんと呼ばれて。子はやすたつと答へけり。扱ぞ取られやすたつた。うたふ。親は空にて血の涙を……新撰歌枕「その涙といふ所にうたふやすたつと云鳥の餘るが、此涙のすなこの中にくくして子をうみおけるを。獵師母のうたふがまねをしてうとふくとよば、やすたつたとはひ出るを、取ぞと申す。

の山がおくへ聞へて。太夫の慰に是へ出て聞たいとおしやる。地是へはいつておもしろいことうたふてなくさめて下され。あつとおやおは笠かたふけおくを見やれば夕霧の。英蓉ふようのまなじりをとろへて夕べまつまの玉のをの。今ぞきれ行いきづかひ。やり手禿に手をひかれ。チヨカたに「かりし其姿おやこいめもくれ。地むねふさがりもる、涙を夕霧も。それと見るよりとびたつことく。心をむねにつみた、むふとんの上にかつはとふし。おもひを涙にかよひせて。人めを中には、かりのせきたぐるこそあひれなれ。サアくあひの山はやふくといいければ。あつと涙の玉ざら。うたふこゑにも血の涙。子はやすかたのさるづりや引

其時母鳥來りてあなたこなたへ付ありき鳴なり其涙の血の、き紅なるが雨のこくふるなり云々(謡曲拾葉抄所引)

あひの山

夕べあしのの……まよふ數々の。圓の山の文句。これはさきに見えたる歌の替歌かと思はるれど、末の句明ならず。但し葉林子の自作にや。傾城反魂香にも替歌とおぼしきもの見ゆ。  
夕べあしたの……月をにくみし夜ハも有」の一段は朝夕憂き勤する遊女の身の、花の盛もぼんの一時間にて、やがて散り果つる身と知りながら、迷ひては書き送る多くの文にも誠の程はあらはし得ずして、名に高き富士の山さへ、比べてはなほ籠ともいふべき、踏み分け難き戀の山に、われから迷ひ入りて、思ふ男(岡夫)を引き入れてはかなき夢を結ばんとて、月を惜みし夜半もありの意。  
夢の中戸の夢枕。はかなき夢の通路の中戸を越えてはすはすは

あひの山、夕べあしたの。うきつとめ。花一。時のながめとしれ共。まよふ數々の。地文にそめても誠のうすく思ふかたへとするが成。ふじもふもとの戀の山我ふみわけて我まよふ。夢の中戸の夢枕。月をにくみし夜ハも有。つらいさしきをもらひれてよそに。行身を。かの人にあよつとかしまの神もしれ。しんぞ嬉しきかひいさの。身にもこたへてわすれめや。初手二と迄ハ。ふる雪の。つみもおそれぬ無理起請。神も佛も二ツのみ、にうそと。誠をさ、やきのはしのくもでに物おもふかうした、くをあいづにてまれの御げんもまがきこし。

なき枕などの意なるべし。當時遊女が中戸の合にやり手の目なわすみし事あり。それをいへるにや。(附圖第十六参照) ●冷泉 淨瑠璃物語即ち十二段草子の「さてもつこの冷泉」といへる所のふしつじと。●更科冷泉もるといへる所の筋つげなりといふ。つらい座敷：身にもこたへて忘れぬや 思はぬ客に投げられて愛しやつらしやと思ふ座敷を貫はれて、他の人に投げらるる身を、その人ならで彼の思ふ人と一寸相引するその嬉しき可愛さの身にしみわたりて忘れずの意。●ちよつとがしまの神もしれば一寸、貸(遊女が客に見合をするために揚屋に行くこと)を鹿島につけて、鹿島の神も知れといへるなり。●しんぞ \* ●無理起請 遊女が客に強ひられて、心には思はずながら、諸神に誓ひて行末を契る誓文。●ささやきの話 備後國にあり「くま野なる音無河に渡さばやまゝの橋をびく」(秋のれさめ所引) ●くもて 蜘蛛の八つ足の八方へ出でたるが如く、橋、すじなどの多く打違へるをいふ語にて、材木を組み違へて橋の梁、桁などを受くるものなり。くもてに物思ふといふ。ささまに思ひ亂るいふ。

身は十年の契舟 遊女の年は普通十年なりしにや。人倫訓蒙圖葉に「傾城 太夫天神鹿戀半彌横町都鄙のもの此所へ奉公に出すなり。年のさだめは出入の年はのけてつとめ十年ときわめて云々」と見えたり。

朝込 誹諧通言「ゆふへの歸りを待て朝の間に呼ぶ事なり」嬉遊笑覽「夜未明に來て廓門の閉くを待て入るをいふ」阿貨の賣 地獄にて受くる阿貨の意。しまひ太鼓 三番太鼓を見よ。\* 死出の山路 冥途に同じ。遊きて歸らぬ路。涙川 浮世へだつる涙川とあれ

何をなげくぞ歎きても身の十年のつなぎ舟。出舟のけふの今日名残なごりの床あすの。朝込こみ枕より。跡よりやり手のせめくる責る責。かしやくのせめより。なをつらくしまひ太この音迄も。じやくめついらくとひゞくなりしでの山路ちは誰とても一ひとつとまりの旅のやと。うき世へだつる涙川此世にうき(塵)更科名さららしなや。をば捨おやすて身をすて、櫻花かやちり散く引五ッでは糸をよりそめ六ッやなに(七)難波に。此身しつめて八ッでやり手につきそひ。九ッで戀の小づかひ。十ッや十

ば、三途の川の意に用ゐしもの如し。櫻花かやちりく 松の葉、二上りの部、さつまふしに「おやはたこくに子はしまばらにさくらばなかやちりく」とあり。此頃より出づ。五ッでは以下は手鞠歌の替歌なるべし。戀の小づかひ 禿となりて文の使をするをいふ。床は伽羅く 床は上上といふに同じ。伽羅は物をほめていふ語。心中萬年草「わたしが妹にお梅と申てずんときやらめてこされ共」種まき捨しなぞし、 なたし、は夕霧の一子源之介をいふ。三途の川 \* 三途の川霧 三途の川霧と消ゆる其身も昨日今日とは思はず。人目にもしつ見えすし、珠数を手にとることもなくの意。あだしの 死人を葬る所。

五のはつすがた。かもじ入すの。ちがみふさくいしやう初のこなし。心利りはつて道中よふて。戀知しりわけしり文のぶ草んしやう。思ひひりく。床の伽羅くッちんやじやかうのかをり迄。今のたむけとくゆらする。種ままき捨し。なてしこの花のさかりをよそに見て。おしや二つの川か霧と。きゆる其身も人めにも。きのふけふと今迄にじゆずを手にとることもなく。何をか後世のみやげ共いさしら露(不知白)のあだしのや。あいの山のべより。あなたの。友とてのしきみ。一枝一しづくこれが。めいどの友となる。地しるべとなれや此ことばかた見共なれるかうとなれ。まよふな我もまよのじと思ひをこめし一ふしに聞人。あのれをもよほせり。扇屋ふうふなさけ深くなふこなたの聞及ぶ。藤屋の伊左衛

●此あひの山の章の始より此あひの友となるまでの間は間の山の文句の間に遊女わけて夕霧の身の上を綴り込みたるなり。

佛の三十二相、足下平滿、足千幅輪、縱長光澤、足跟圓滿、手足細軟、手足網縷、足趾圓厚、伊尼鹿腦、勢味嚴密、白分圓滿、身毛上疎、孔生一毛、身毛右旋、身真金色、常光一尋、皮膚細軟、處充滿、廣洪其相、師子身相、肩膊圓滿、立身摩膝、師子領輪、具四十齒、齒齊牙密、齒牙鮮白、得上味相、廣長舌相、目紺青相、

牛王睡相、烏瑟膩沙相、眉間白毫、梵音聲相、(新乘法數) 率部婆 梵語なり。方墳または剛と譯す。五輪をいふ。阿字の一刀 阿字は梵字の根本、一切實相の源。只今某が切る髪は云々 今切る髪は迷を去りて一切實相の源を悟らしむべき阿字の一刀、彌陀の利劍をもつて、煩惱即ち迷の羂絆を断つものと觀念せよの意なり。彌陀の利劍 善導の觀無量壽經の疏釋に「利劍即是彌陀號。一聲稱念即皆除」と見ゆ。彌陀の稱號を唱ふれば極惡重罪なりともこれを除去消滅せしむること利劍を以て物を断つが如しとの意。煩惱は迷、菩提は悟り。八功德池 極樂淨土にありといふ池。八功德は、一、澄淨。二、清冷。三、甘美。四、輕軟。五、潤滑。六、安和。七、飲無患。八、飲發四大。

門殿そふな。忍ぶことも時によるむすめ共思ふ夕霧が。りんじうの心がたんのふさせたいはやふあふてくだされ。ア、かたじけないと走りより。 詞太夫又あひにきたいの。伊左衛門様わしやしぬるわいのふ。 地か、さましんで下さるなと。すがり付ば家内の上下。わつと一とにこゑをあげ泣しづ。むこそ道理なれおもき。枕に手を合せ。且那樣ちいさい時より御くらうに預り。御恩もほうぜずしにまする。是さへはかなふござんすにいとしい男かひいひ子に。あひせて下んすもふわしや佛でござんすとてもものことに伊左衛門さまの手で。 詞此かみ切てもらひ佛のかたちになつて。 地おやこの手から水をくと云こゑもたへく、にこそ成にけれ。 ヲ、かみかさりのかりのたふれ。佛の三十二相とい

荒 ちあら木作りのそとはを云。只今某が切かみは阿字の一刀。彌陀 利劍をもつてばんなうのきつなとく、ん念せよと。さしぞへぬいてふたりそひねのねみだれがみ。ふつ、ときれば源之介あつたらかみをと身にそへて。もたへふしてぞなげきける。 詞かさねてしきみの水をたつさへ是夕霧人がい、一生造悪のしやばせかい。 地わけて遊君ながれの身。おもてに紅粉をかざつてあまたの人をまよひし。綾羅錦繡を身にまとひおほくの酒をくみながし。ぼんなうのたねをうへてばだいの根をたつと、遊女のこと。此水の極樂の八功德池の水と思ひ。雨甘露法雨愍衆生故ときく時。是をのんで心身をうるほし九ほんの上せつに往生し。半蓮をわけて待てるや。是其しるしと同じくかみををし切

雨甘露法雨慈衆生故 出典明かならず。無量壽經には「猶如大雨雨甘露法雨衆生故」とあり。意は同じ。

九品の淨刹 觀無量壽經に説く所の極樂往生相の等階。九品は上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生。

下袴の着い者 下袴を着けたる者。

て親子夫婦ふうふのたむけの水衰あひれにも又頼もし。かゝる所に吉田屋の喜左衛門。六尺金箱にかねばこもたせ。是の平岡左近さまのおくがたお雪さまの御使。夕霧を請出す所其寄はつちがひ是非ぜひもなし。され共代金八百兩。其ための金子なれば外使につかへん様なし。御病氣以外の外麻のよし此金にて請出し。一時なりともくるわの外にて。往生させませとの御使なりと地若いふ所へ。下袴ばかまのわかい者かねばこあまたかたげさせ。是々扇屋殿。我らハ藤屋伊左衛門さまの御老母。藤屋妙順父御さまよりのお使。伊左衛門さまいつてこの御かん當今ハ此世になき人なれば。お袋さまの我まゝに勘當御めん免なりがたし。夕霧さまにハ御一子迄有事ことよめ御ご孫御ごに勘當御ハなし。藤屋妙順原のよめ原をくるわ内のうち内に

命さへ云々 醫藥所時何なりともして命だけにもとりとむることを得ば、其費用などは厭ふものにあらず。扇屋の身代半分は致すべしの意。

されはなる \* 意氣方にや。心ばせ。いきつた 心がけ。

てころ殺されず。一時成共くるわ麻を出し。外にて往生させましたいとおねがひ。金子二千兩持ちさん参いたす。地サアア〜片時原もくるわを出して下されと。さほ免ひい勇さめば扇屋了空。尤なれ共金子をとつて隙勤をやる死とい。行末の年月無事方でつとめる女郎のこと。今しぬる夕霧に大分の金銀とつて。隙をやるハ此扇屋盗ハぬす人金と申もの。ことにぜんせい盗して親かた方に。大分もうけてくれられた此太夫。命命さへあらふならば。此扇屋が身代半分入いれます。此金子夕霧そなたにやる。りんじう終に金異やる異とい異な異こと申様なれど。此金では万部の經讀もよまる。跡讀の追善讀ゆい讀ごんめ讀され讀サア讀く讀いとま讀やつた。くるわ原をつれてお出なされと。地地されはなれたるいきかた住いさすが所住にすめばなり。今をかぎり限

ゆゆしい、すぐれたる。

萬僧供養 千僧供養に同じ。あまたの僧を請じて行ふ供養。

三尊の來迎 三尊は彌陀、觀音、勢至。佛殿に信念厚くして念佛の功を積みたるものの臨終には三尊來迎して淨刹に導き給ふといふ。

の夕霧につことわらひ。調ア、どなたもく、有がたい御心  
 ざし。お礼申て下されませ是源之介。此かねの親方殿より  
 下された。地そなたにか、がゆづりじやゆ、しい町人にな  
 つて。父様とつさまの名をあげたも。わがみの出世を草葉の  
 かげより見るならば。万僧くやうにもまさりて。か、の佛  
 になるぞや。去ながら伊左衛門様源之介に妙順さまをなら  
 べて。三尊のらいかうとおがみたふ、こさんす。ヤ妙順様よび  
 にはしれと立さのぐ。走いやよびにやる迄もなし。きづかひ  
 がつてアン門口にと。手代ともなひ入れればなふ花よめこ  
 めづらしやく。珍うれしいたい面誠の佛の西方のお迎ひ。  
 此妙順のこちの家へむかへ取。姑かねづくめにして養生し。  
 此しうとめがせい力でほんぶくさせて見せふぞと。家内が

●此作の興行ありし寶永七年は夕霧の三十三回忌に當れり。三十五年五十年又百年といへるは後の年回忌をのべたるにて、見る人袖を列ねといへるは、夕霧の芝居を見る人絶えまじの意なるべし。

いさむきほひにつれて諸病のきよりほんぶくの。かほもい  
 きくにくくと立てをとるや扇屋夕霧。うれへかへつて  
 よろこびをかたり。つたへて三十五年。又五十年又百年千  
 とせの秋の夕霧を。なを万代の春の花見る人。そぞをぞつ  
 らねける

奥書  
右之本令吟覽頌句音節墨譜等不殘毫厘令加筆候可有開板者也

竹本筑後條

重而予以著述之本令校合候畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

正本屋

山本九兵衛版

大坂高麗橋堂丁目

山本九右衛門版

第一卷註解索引

語句の排列は普通の辭書の體に倣ふ。

重は 心中重井筒  
淀は 淀鯉出世繼徳  
夕は 夕霧阿波鳴渡

ア

摺抜切る	重、一八
あいたして	重、三七
あいの山(あひの山)	淀、六
あかく	重、二二
悪性 <small>あくしやう</small>	淀、一三
悪性がね	淀、一三
揚屋	淀、一八
揚屋の届	夕、三七
あこぎ	夕、五〇
朝込 <small>あさこみ</small>	淀、四一
朝日山	

阿字の一刀	夕、五三	相性	淀、二一
あだしが浦	重、四九	あひずり	淀、二九
あだし野	夕、五一	間の山 <small>あひの</small>	夕、四五
あたふのわるい	夕、二七	あまえる	夕、一六
あたま	淀、四六	天逆様 <small>あまかさま</small>	淀、二三
味な事	淀、七	あやかちもの	淀、四八
小豆織 <small>あづきおり</small>	淀、四	あやめぐさ <small>(芳澤あやめ)</small>	重、五一
あつさ	淀、二二	嵐 <small>(三右衛門)</small>	重、五二
あつてすぎたこと	重、三三	あられぬさ	夕、一九
吾妻請出せ云々	淀、二五	いさかた	夕、五五
あどなし	夕、二五	いさずり	淀、一一
阿房拂	夕、二〇	息杖	淀、一五
阿波座	淀、二	いさば	重、一四
阿波座鳥	淀、二	いさりさる	淀、六八
阿波座ののら鳥	淀、二	幾瀬	重、二八
栗田口	淀、二九	生玉	重、五七
逢ひかかる	夕、一五	池田炭	重、四四
相駕籠	夕、四四		

石火矢	淀、二六	一口	淀、四三	裏白	夕、三
伊勢講	重、三六	いよし	夕、三	賣らざいで	淀、五三
伊勢の縁日	重、二〇	熬酒	淀、四八	賣りへぎ	淀、五二
いたいけ	夕、二五	いりゑ	重、九	うろろ涙	重、五六
いたち堀	淀、七	色襦籠	重、四九		
一念發起	重、一九	いろは茶屋	重、六	永日	夕、三五
一分	淀、一八	ウ		惠方神	淀、六九
一門がひ	重、一四	雨甘露法雨感衆生故	夕、五四	惠方棚	夕、二
一角	重、二〇	浮世小路	淀、一三	惠方参	夕、二三
一興	重、五六	うさんらし	夕、八	榮耀遣	重、一三
いとしばや	重、三九	うすがき	重、二	えいやをう	夕、三三
命が寶	淀、三五	善知鳥	夕、四八	オ	
命がらり	淀、四四	うちかやす	重、五四	おうへ	夕、四七
岩木を分けぬ人心	重、四六	うちとのもの	重、二二	おかさま	重、二九
いはれぬ...	淀、五九	うつそり	夕、二六	おがんです	夕、一六
岩井半四郎	重、五一	うつほぶね	重、四九	奥さかんより口さけ	夕、二三
いんま	重、二八	馬取	夕、二九	おしまの心中	重、五一
今の間	重、一五	埋井戸	重、五七	おじや	淀、五〇

おしやる	夕、四八	おろせ	夕、一	かさとる	淀、一〇
お乳	夕、二五	おろそ(おへさま)	重、五	呵責の責	夕、五〇
落椽	淀、六二			貸す(遊女の)	淀、四五
お敵	淀、四五	かい	重、一八	かたいき	淀、六
鬼瓦	重、四八	改易	夕、二〇	肩がわかる	夕、三〇
鬼の首とつた様	夕、三四	戒名	淀、二〇	肩がつかへる	重、三〇
おはもじ	夕、一九	更衣	夕、二一	かたひくろ	淀、五
御秋の練衆	夕、三〇	格子	夕、五	片岡(仁左衛門)	重、五〇
大内方	淀、二九	格子祝	重、二九	かち栗	夕、一〇
おぼこ	夕、五	加賀笠	淀、三八	合點	重、五
大ぬさ	重、三九	抱帯	淀、三七	門詰も踏まされず	淀、二一
臙染	重、四九	鏡(餅)	夕、二	門の飾(正月の)	夕、二三
御屋敷役	夕、二五	かきぶね	重、四九	皮切	淀、二六
親じや人	淀、二一	駈落	重、五五	禿	淀、八
お山	重、六	かこふ	重、三一	替名	淀、五
お山げんじ	淀、二六	鶴の橋	淀、七	顔見	重、六
下りは	淀、四九	笠取山	淀、四二	紙衣	淀、六三
おりゐの衣	夕、四六			紙子染	重、二

紙子の四十八枚	夕、一七	杵であたり杓子であたる	淀、一七	さる物	重、一〇
紙子の火打膝の皿	夕、七	氣の通りぬ...	重、四四	されはなる	淀、三三
かみさぶ	夕、七	氣の通つた女房	夕、三四	ぎふん(きん)	淀、二八
上する女子	淀、二三	際	重、二	氣を通す	淀、一四
紙花	夕、一三	際 <small>さい</small> の商あつとをつめ	重、三四	ク	
神佛のひかへ綱	夕、一四	考 <small>き</small> 婆 <small>ば</small>	夕、四七	九軒(九軒町)	淀、二
咸陽宮	重、四六	氣病	淀、六四	公事の宮の	淀、一
唐の聖	重、二四	給分	夕、三〇	曲事に逢ふ	淀、一三
輕口	重、三八	金山	夕、四	楠葉	淀、二五
かれうびん	夕、一一	金紗	重、二	くだかけ	淀、三九
キ		さめる	重、一四	口合	淀、一二
氣合に構ふ	夕、六	さやうこう	重、二	口入	重、八
させる	淀、三六	ぎやうさん	重、一四	口が上る	淀、四九
北脇	重、四四	京三界	淀、一九	口さかんより奥さけ	夕、二二
吉左右	淀、六八	きよくがない	重、三一	くつわ	淀、三一
木辻	淀、四四	伽羅	夕、五一	くひこむ	重、一三
狐川	淀、四〇	木遣	夕、二	くふ	重、九
		切米	夕、二九	九品の淨利	夕、五四

熊手	淀、一六	慳食	夕、二	こじれたるい	夕、二六
ぐめん	淀、五五	けもない	夕、六	五尺手拭	淀、三七
くもて	夕、五〇	こ		小尻がつまる	夕、七
公文所	淀、三四	ごうにん(ごふにんを見よ)		腰をよぢらす供	淀、三八
藏屋敷	夕、二七	紺屋の形	重、二	御鎮座	淀、四六
くろめる	淀、一一	紺屋糊	重、九	子なかなしたる中	重、八
元日から元日まで	重、一七	こがひ	重、三一	こなさ	夕、一六
願ほどき	淀、六九	木枯の森	淀、四〇	こは異見	淀、六四
ケ		こさ	淀、一一	木幡の里	淀、四三
傾城	淀、三一	五逆	重、五二	業人	重、二〇
けいせん	夕、二六	獄門	淀、二九	こふや(こらや)	夕、三
けくて	淀、三五	御見なる	淀、六〇	こまめ	
けしほど	重、一七	心の駒	重、三八	今身より佛身に至るまでよ	重、四八
下心	重、二	五臓六腑	淀、二〇	く持つ	夕、二六
血脈	夕、四六	ござ船	淀、三八	こひやくしい	淀、二二
けでんする	淀、五〇	小姓	夕、五	子を捨る數はあれども身を	
けばけばしい	重、一八	小姓立	夕、二	捨る數なし	重、五三



サ

西國(巡禮)	重、三六	三十二相	遊、一九	鹿の巻筆	遊、四八
西國二十三所	重、三六	三尊の來迎	夕、五二	しき(我等しき)	遊、二六
さが	夕、三一	三世	重、二〇	色代	夕、三四
坂田藤十郎	遊、五三	三重	重、二三	しこだめ参る	重、一一
さがなし	夕、二〇	三途の川	重、四八	自身番	重、三七
ささゆき	遊、三五	三番叟	遊、七	しすます	遊、五七
酒の酔本性忘れず	遊、一七	三番太鼓	遊、三	紙燭	重、二六
雑喉場	遊、八	三枚肩(南無三枚肩)	遊、八	したく	夕、二二
さんざん	夕、二二	三谷(山谷)	遊、一	下染	重、二
ささやきの橋	夕、五〇	算用算勘	遊、二〇	七九寸	夕、一三
差足	遊、五八	算用づく	重、二二	しづ	遊、九
さしこみ	重、二九	さもしい人	夕、四一	實事の格	重、一七
差も引もなく	遊、五三	さよ格子	重、二四	して	重、六
佐太の煮賣	遊、二五	さよぶとん	重、三八	四天王	遊、四四
さつと	重、九	さればいの	重、三三	してやる	遊、五二
佐渡島傳八	遊、九	座を組み	重、五	しなだれる	遊、三三
ささ	遊、二八	座を持つ	遊、四九	しなだれ男	遊、四四

篠塚(次郎左衛門)

篠塚(次郎左衛門)	重、五一	しめんづく	遊、三二	しらける	遊、九
師走坊主師走浪人	夕、九	霜風	重、五六	ス	
十ざい人	重、二〇	蛇	遊、六	杉重	遊、二五
十文字の道具	夕、二七	生薑酒	重、二二	すずし	遊、一三
しほ	夕、二二	生薑茶	重、三五	煤竹	重、三
鹽茶	遊、六〇	正月(正月買)	重、三四	すつきりと	重、五
鹽の長二郎	重、一三	正月買	夕、二	砂場	重、二
しほり泣	重、四二	正月のお客	夕、三四	角前髪	遊、二
四枚肩	夕、四六	生々世々	夕、二〇	ずんど	夕、五
しまつ	重、一一	しやうど	遊、二九	素錠	重、五
しまひ太鼓	夕、五〇	しやまたるい	遊、二四	セ	
死脈が打つ	重、四一	しやらくら	重、二六	せいいたうする	遊、五
しんき	遊、四一	しゆじやか(茶釜)	遊、一	笑止	遊、二三
しんきのわく程	遊、四六	俊寛僧都	遊、三四	少分	遊、三六
しんぞ	遊、九	食悦	遊、一〇	せきたぐる	夕、四八
しんどう	夕、五	蜀江の錦	夕、九	節季候	夕、四
しめなき	夕、三一	初夜	重、二八		
點野	遊、二五				

せく	重、三一	それや	重、三〇	竹田	重、五〇
せと	重、二〇	候べく候にやる	夕、六	太左衛門橋	重、七
ぜね	夕、二九			他事なし	夕、三五
せん(浴びません)	淀、二五			墨算	重、一三
せんざい	夕、四	太鼓	淀、一九	縦横沙汰	淀、四四
せんじやうはる	淀、一二	大黒舞	淀、四一	たてる(金を)	淀、三三
千日寺	重、五〇	太鼓持	夕、四	たのしめの	淀、二五
善は急げ	淀、四	大じん	淀、八	だんかふ	重、四〇
せりふ	重、三三	大々神樂	淀、三三	談義參	重、一三
臺詞	重、五一	太夫	淀、九	だんない	淀、五三
		大佛殿の勸進所	重、五三	たんなふ	淀、三五
		大曼茶羅	重、五三	丹波越	淀、五六
		道具(杖)	夕、二八	たも	重、六
		道具持	夕、二八	たらす	夕、一七
		寶寺	淀、四〇	樽屋町	重、四六
		たきつける	夕、二七		
		瀧の壺	淀、六八		
		だくだくと	淀、五七		
				中間	夕、二二
				子	

中年	淀、四四	つば	重、二八		重、四二
ちうに提ぐ	重、一七	つぎらぬ...	重、二八	胴がすわる	重、四二
ちかのしほがま	重、五五	つもる	夕、三九	同行	重、一三
定	重、四二			どうよく	夕、一六
丁銀	重、九			胴をすゑる	淀、五六
帳臺	重、一九			とがり聲	重、一三
町所	淀、五	鳥目	夕、三一	齋	重、三六
鳥目(てうもくを見よ)		でかいた	重、六	土賊色	重、三
茶屋	重、二	手形	重、九	とこやみ	淀、五一
ぢよさい(じよさい)	重、二九	手ぐすね引く	淀、八	土佐駒	夕、一九
		手ふり	淀、三六	としばいなる人體	重、八
		てんがう	重、二七	とほんと	重、二八
		天神	淀、九	取粉	夕、二
		天赦鬼宿日	淀、五四	取りしづめもない	淀、五一
		でんど	淀、一一	どれい	夕、二七
		天満の神明	夕、二三		
		手夕霧	淀、五三		
				な	夕、二八
				ナ	

内證	淀、三三	二	能の脇師	淀、七
長池	淀、四三	にえる	のしむがる	淀、一三
中橋	重、二三	錦木	鬘斗目	夕、二四
長持(遊女の)	淀、五	日親様	延	重、三二
流れの身	夕、二〇	にやこい	のら	夕、三六
仲居	重、二六	女御	のらぞんざい	夕、三六
長刀の草履	夕、九			
投入	夕、五	又		
七種はやす	夕、四六	ねす人に藏の番磁石に針		
七つの芝居	重、五〇			
難波津の歌	夕、一	ネ		
涙川	夕、五〇	ねすりこと		
南無三寶	重、一五	ねだれもの		
南無三枚肩	淀、八	子の日		
なんど	重、一九	ねばな		
なんのいの	淀、二七	ねびき		
なんば	重、六	根ほり		
なめたり	夕、三			

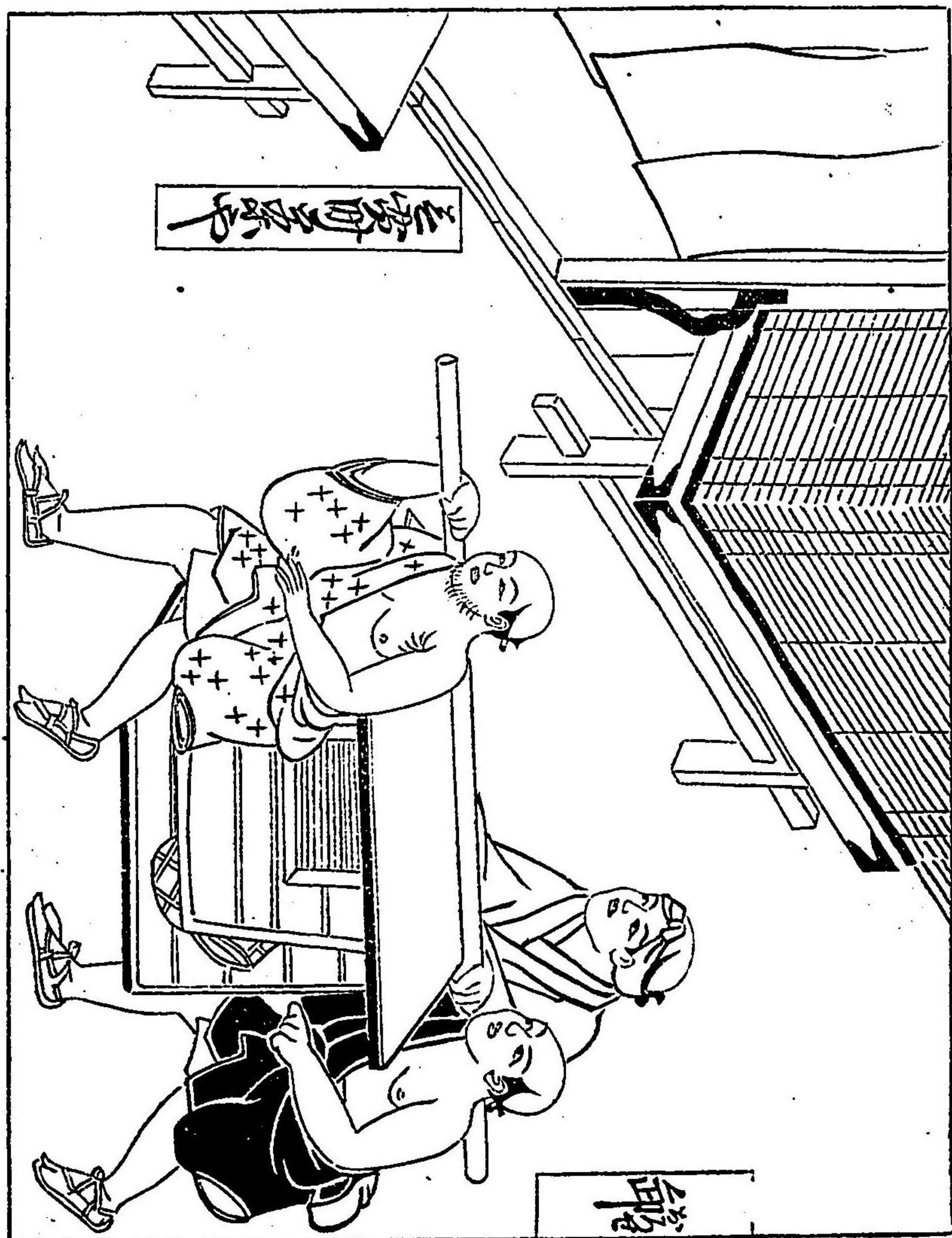
服部煙草	淀、三六	匹(鳥目の)	夕、三二	丙午の女は男を殺す	重、二五
ばつばの絞袴	夕、二二	引舟	重、二五	日野絹	重、二五
初名月	淀、四三	びくにん	夕、三〇	火まはし	重、二四
はな明く	夕、二六	ひさずるき	重、二六	姫小松	重、二五
花色縹子	淀、三七	ひさのさら	重、四四	火屋	重、二七
はば	淀、一〇	ひしこ	重、二六	百里來た道は百里歸る	夕、四四
はばかりの關	夕、四八	ひし紬	重、二六	ひよんな事	淀、二八
灰よせ	重、二七	飛彈椽(山本)	重、五一	牧方	淀、二五
はま	重、二八	額たれる	重、三〇	平野菟弱	重、二六
濱側	重、五〇	ひつそばむ	淀、六〇	火桶	重、二五
はませせり	夕、三〇	ひづむ	淀、一一	フ	
喰出鏝	夕、七	人置	重、二〇	分限者	淀、六
番太	淀、二四	人事いはばむしろしけ	重、三三	無算用	淀、五二
腹は借物	夕、一八	人でなし	重、一八	不道化	淀、五七
はらみく	重、二四	ひともし	重、二六	二瀬	重、二六
		獨武者	淀、四五	藤田小平次	淀、一九
		火なぶり	重、二四	藤の棚	夕、二九
		非人仇討	淀、一一	ぶつてらづら	夕、三二
ひかき	重、四三				

第一巻註解索引

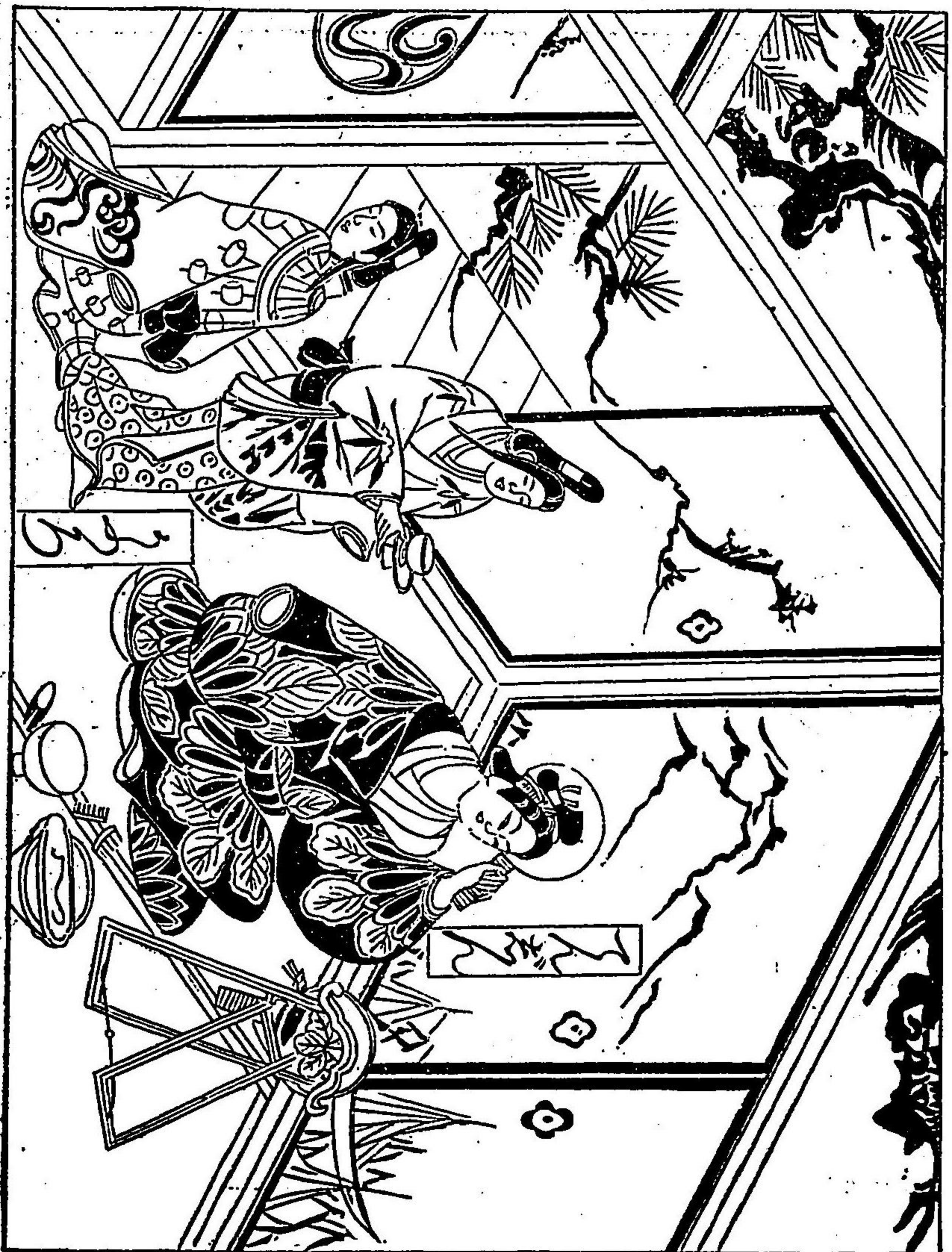
冬とし 風呂屋	夕、二九 淀、三三	法界の男 法界格氣 本道	重、一〇 淀、二七 淀、一〇	まぶる 萬僧供養 豆板	重、一九 夕、五六 重、七
瓢箪町 俵物	淀、二 夕、九	煩惱の犬 煩惱菩提 凡夫心	重、五五 重、五三 淀、三三	まめ男 まをわたす	夕、二三 重、一八
へこむ べんがらしま 扁鵲	重、一三 淀、四 夕、四七	マ まがわく 横島	重、四 淀、四二	三國境の板橋 神子	淀、三四 夕、四六
水 朋輩 棒まかれな 蓬萊	重、七 夕、八 夕、一〇	まきしだす まじくら まじやう者 まそつと まだら雪	重、三八 重、一五 淀、七 夕、三〇 重、二七 重、五三 淀、一七	身すぎ 彌陀の四十八願 彌陀の利劍 陸奥の唐紅の錦木 三津	夕、一五 夕、一七 夕、五三 淀、五八 淀、一
ほうろく頭巾 ほつく 佛の三十二相 穂長	夕、一三 重、三 夕、五二 夕、一〇	町年寄 松(女夫)	重、二七 重、五三 淀、一七 夕、三三	水祝 水入らず みつちやづら 水ものまねぬ	淀、二四 淀、六六 淀、九 重、四

南の茶屋 身のひし 冥加 冥加ない 冥加もない 梅松茶 三輪素麵	重、三 重、三一 淀、三六 淀、六八 夕、三二 重、三 淀、四四	目をかける 女夫いさかひ犬もくはぬ	淀、二二 淀、二四	諸手綱 屋財家財 やすかた(安方) 奴頭 柳(染色の) 八幡牛芳 やぼてりがき	重、三八 重、八 夕、四八 重、一七 重、三 淀、四九 重、二
ム ひげない ひげにする 胸をついた事 無理起請	重、三一 重、二二 淀、五〇 夕、五〇	餅春 餅花 もどく 物さふ 物まう	夕、一 夕、一 夕、四一 淀、六四 夕、二七	山崎寺 山しう 山吹の瀬 關の夜(關軍の) やり	淀、三八 淀、二 淀、四一 淀、二 夕、九
メ めかりをさかす めぐろ めさせ	夕、四六 夕、二九 夕、二五	紋日の長持 もやつき 守口	夕、四 淀、六三 淀、二五	鍵を振る 譲葉(様)	夕、二九 夕、三

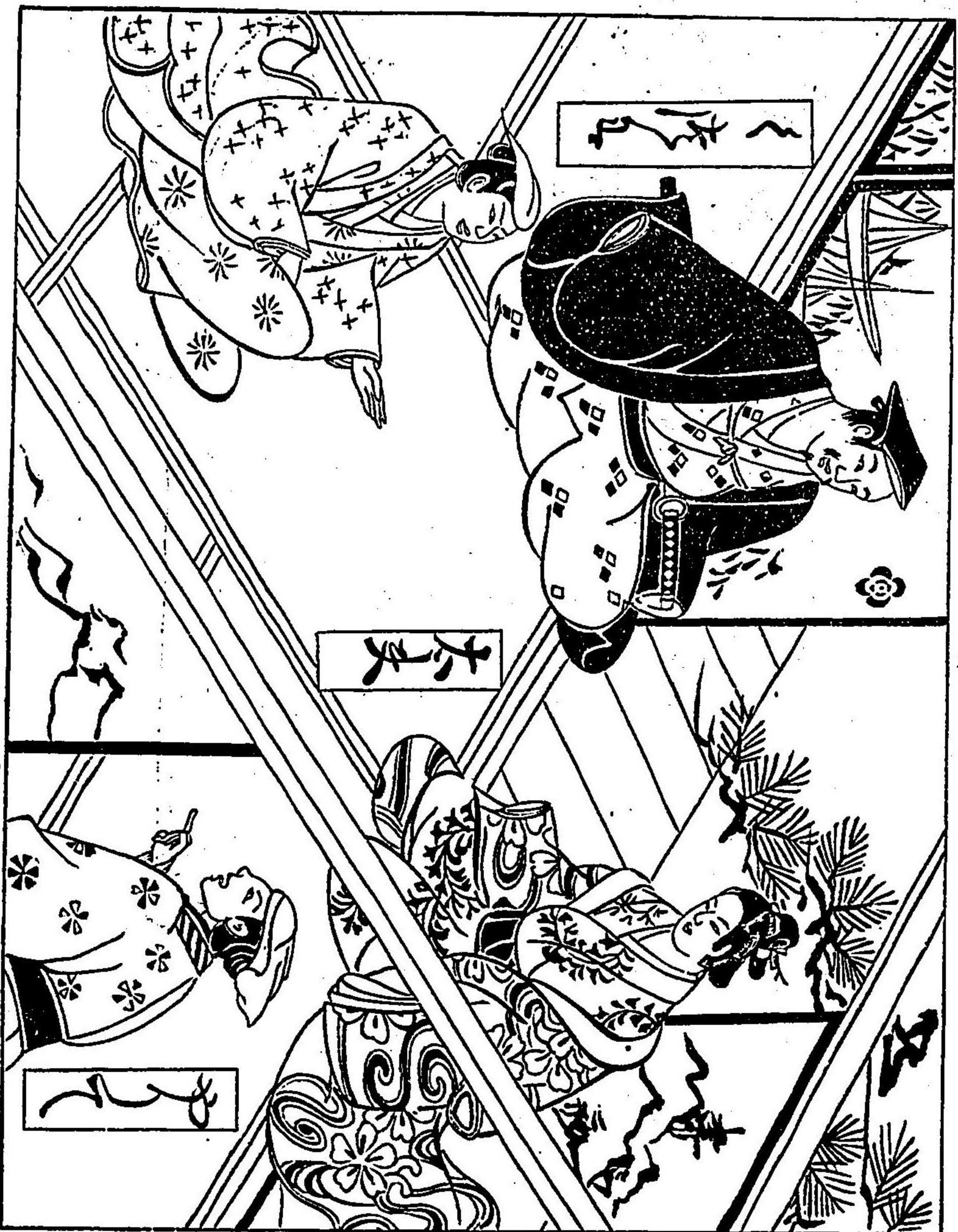
夢の中戸の夢枕 ゆゆしい	夕、四九	来世金 来世金	夕、四七	わせる	重、三
よし衆	重、四四	狼籍	夕、一四	わたるなみ	淀、六〇
よさこひ	重、五一	埒が明く	重、四	わつさりと	淀、二六
芳澤あやめ(あやめぐさ)	重、四〇	ちちがない	重、三八	鱧口	重、五二
おしなひもの	重、四〇	リ	重、五三	わりなし	夕、二一
葦原雀	淀、四〇	龍女成佛	重、二四	井	夕、二一
吉岡紙子染	重、二	六軒町	淀、二一	のこ餅	淀、三
吉岡染	重、二	六尺	夕、五	エ	
淀鯉	淀、四八	若衆方	夕、二	ゑいやおふ(えいやなう)	
夜ととも	重、三五	若衆	夕、五	ゑはう……(えはう……を見よ)	
よね	淀、六	我物づら	夕、三	ゑはう……(えはう……を見よ)	
よね狂ひ	淀、七	わくらは	夕、一七	まようづかひ(えようづかひを見よ)	
よの物	重、六	若子	夕、四一	ヲ	夕、三二
宵寐惑	重、一〇	わさわさと	淀、三四	男は裸百貫	夕、三二
夜見世戻	淀、七	若の峰	淀、四八	男山	淀、三九
夜見世狂ひ	夕、三一		重、四八	小橋	重、五五



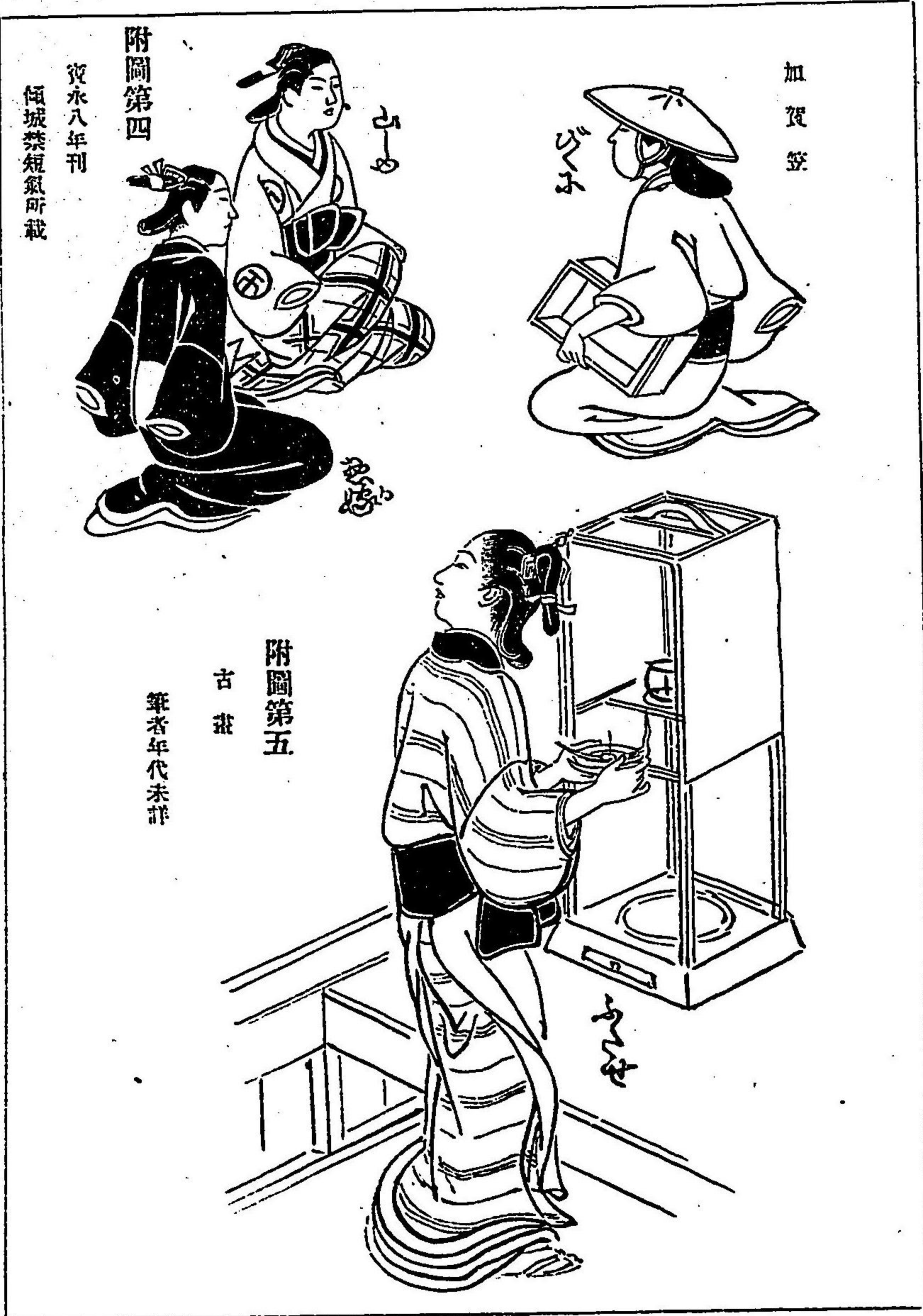
浮世草子 第一卷註解索引終



附圖第一 元祿三年刊人倫圖卷圖所載



附圖第二 元祿三年刊人倫圖卷圖所載





附圖第九

抱帶



同上

二圖共に貞享五年刊日本永代藏所載  
上圖は前にて結べる體 下圖は後にて結べる體

附圖第八

ほうろく頭巾

貞享五年刊  
日本永代藏所載



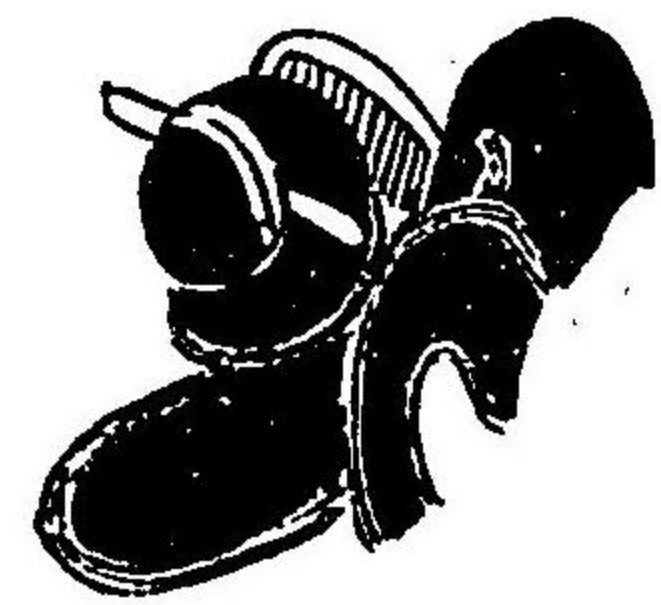
同上

寶永八年刊  
傾城禁短氣所載

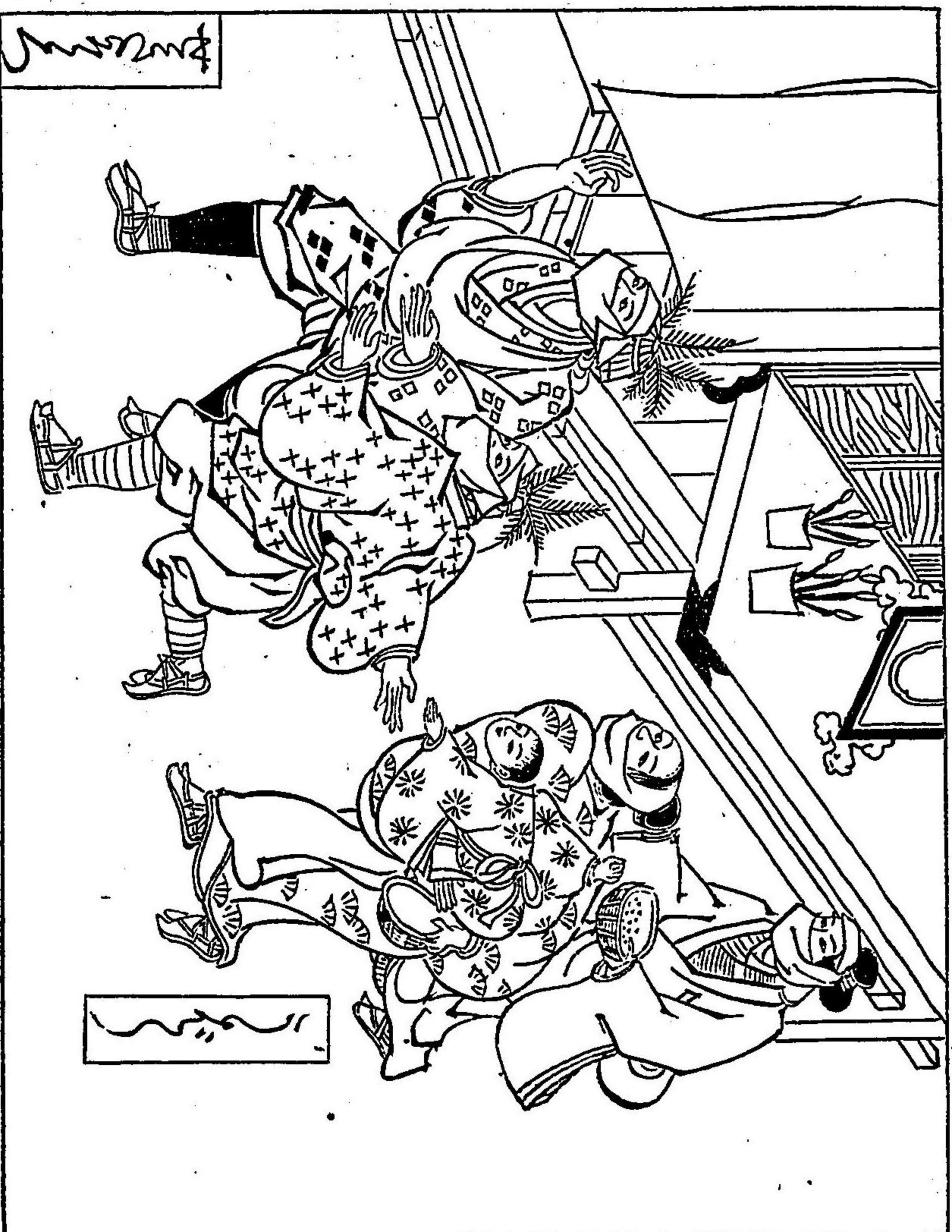


附圖第七 櫛枝曲

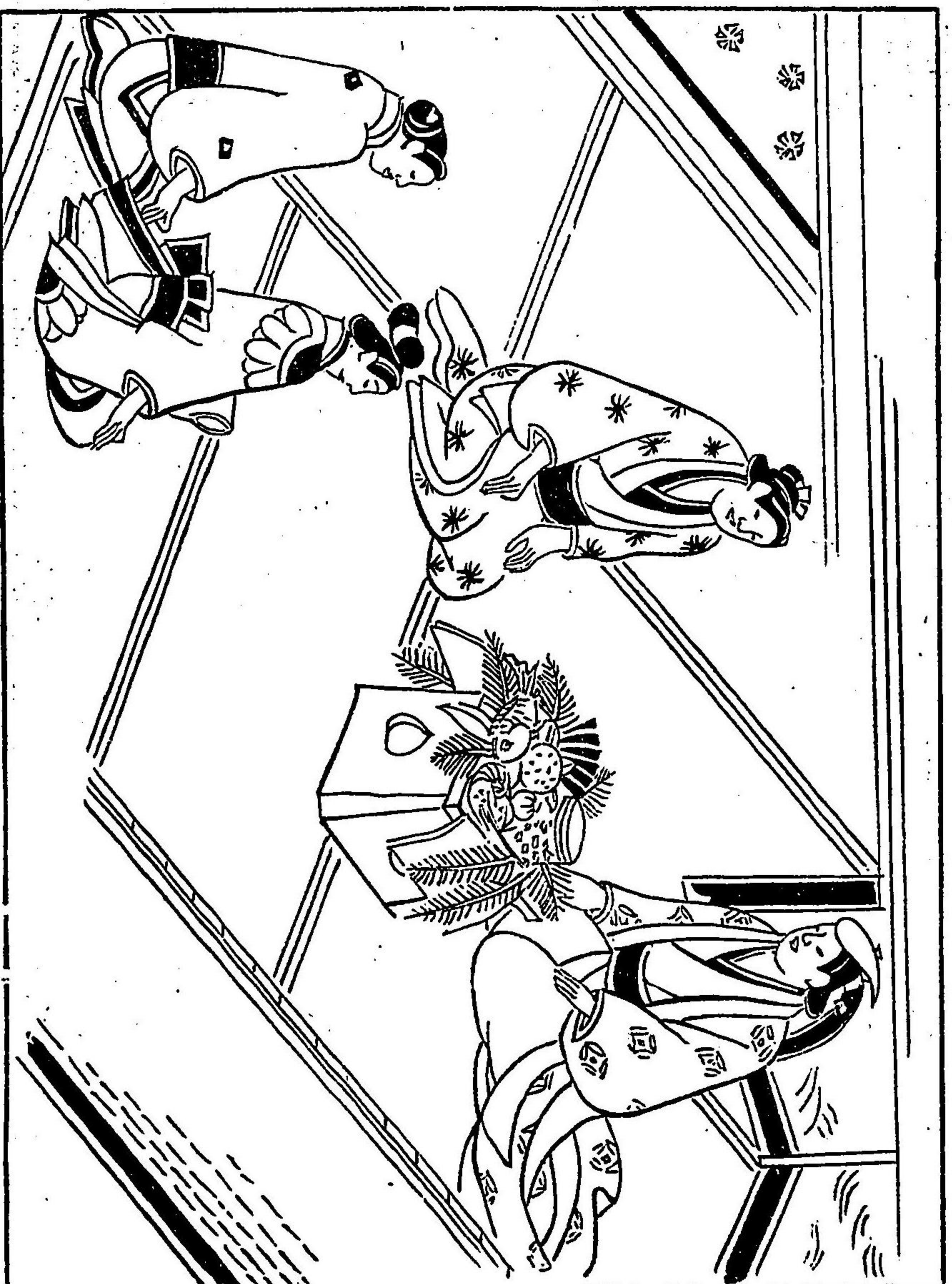
元祿元年刊女用御家圖彙所載







附圖第十一 節季候 元禄三年刊人倫家圖彙所載



附圖第十二 甚萊登 貞享五年刊日本水滸所載

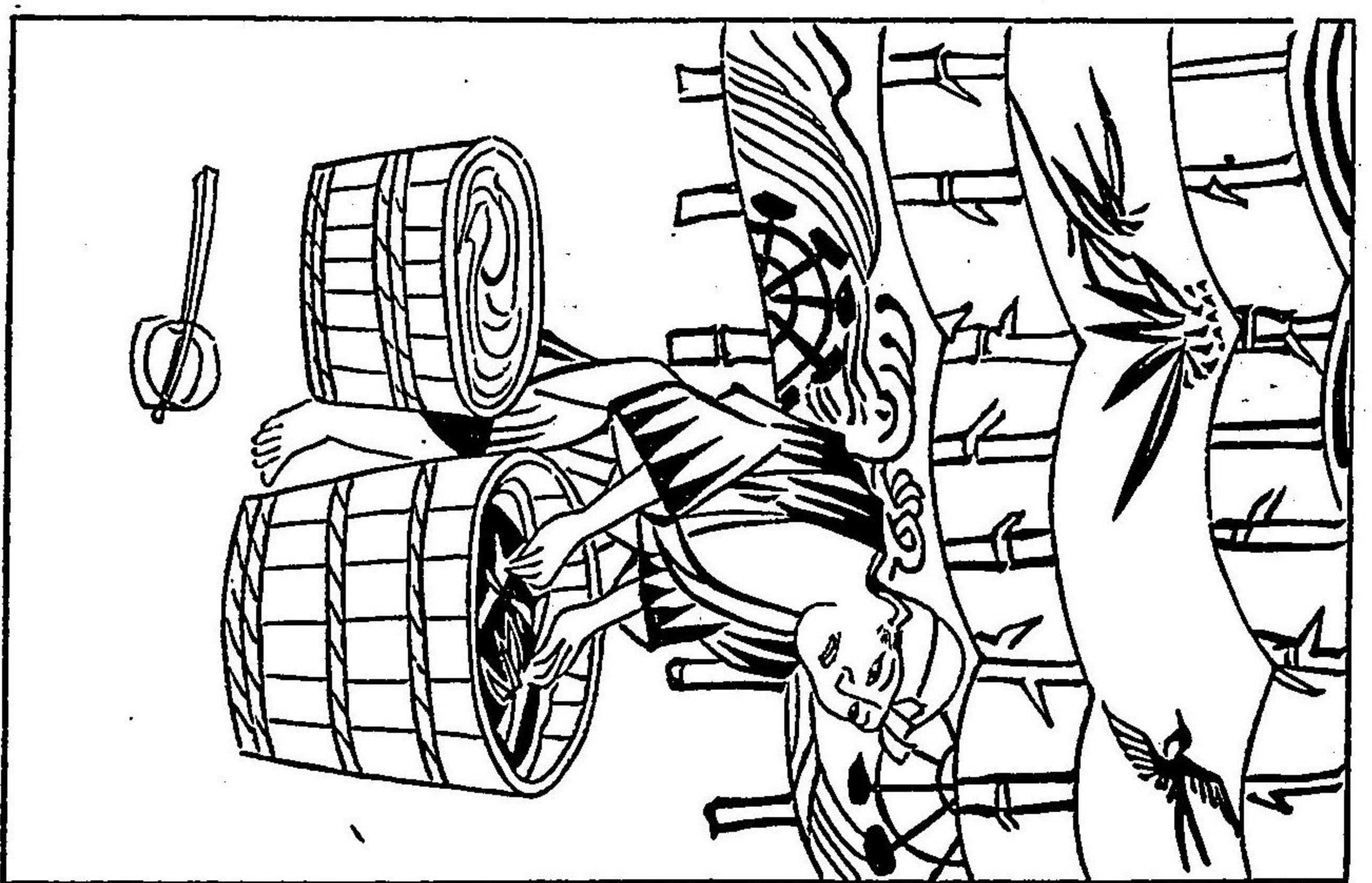


附圖第十三 萬 歲 延寶八年刊繪波盤所載

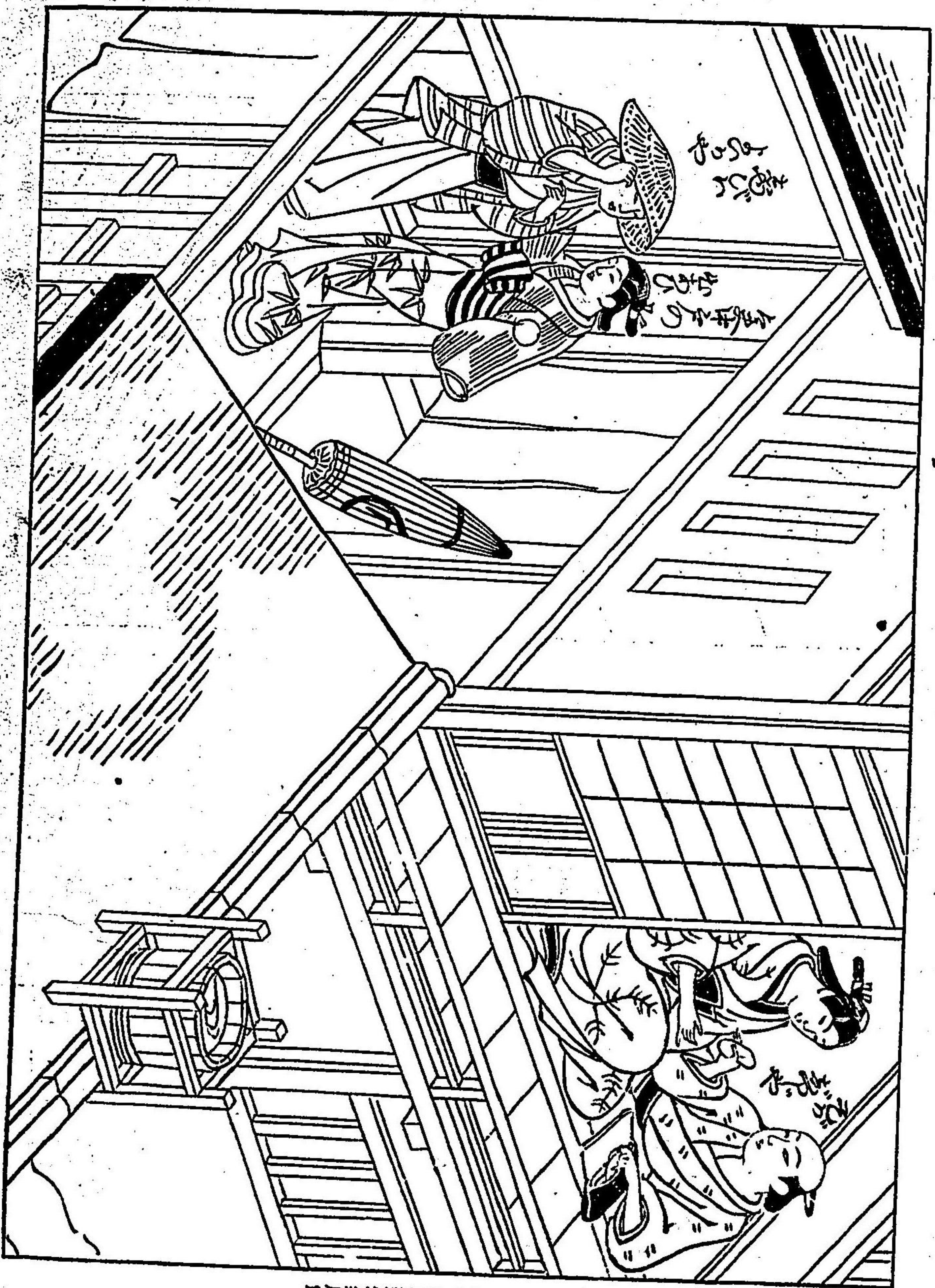


風俗

附圖第十五 元祿三年刊人會勘家圖案所載



附圖第十四 もがら 元祿三年刊人會勘家圖案所載



附圖第十六 中戸の出合 寛永八年刊板城築短氣所載

明治三十九年十二月二十九日印刷  
 明治四十年一月一日發行

定價金八拾五錢  
 郵税金八錢

著者 高野辰之

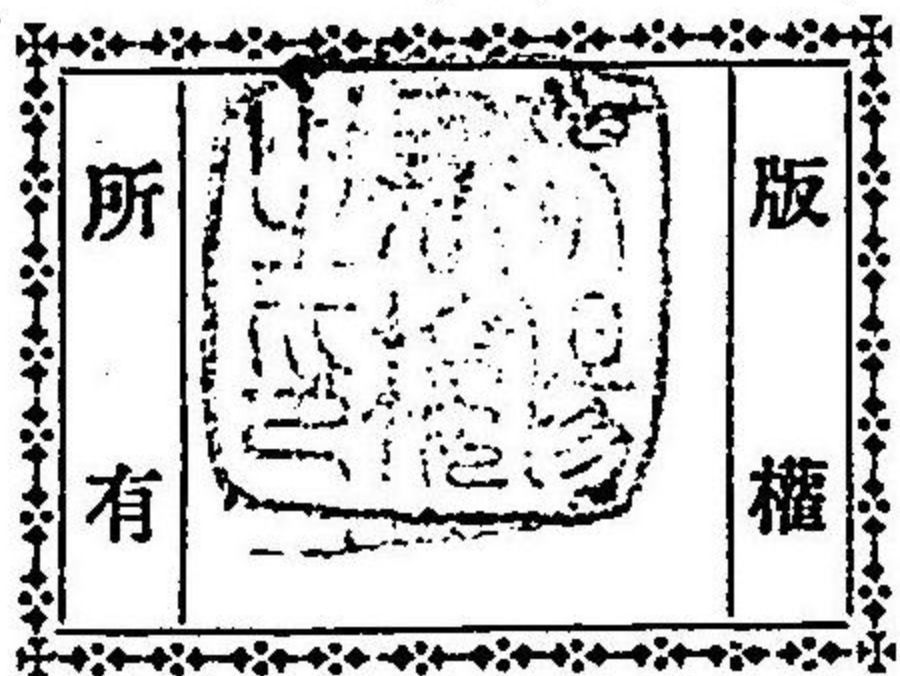
發行者 和田静子  
和 田 静 子

發行所 春陽堂

電話本局五十一

東京市日本橋區通四丁目五番地

近松世話淨瑠璃詳解  
 第一卷



印刷者 中野鉄太郎

印刷所 帝國印刷株式會社

東京市京橋區築地三丁目十五番地

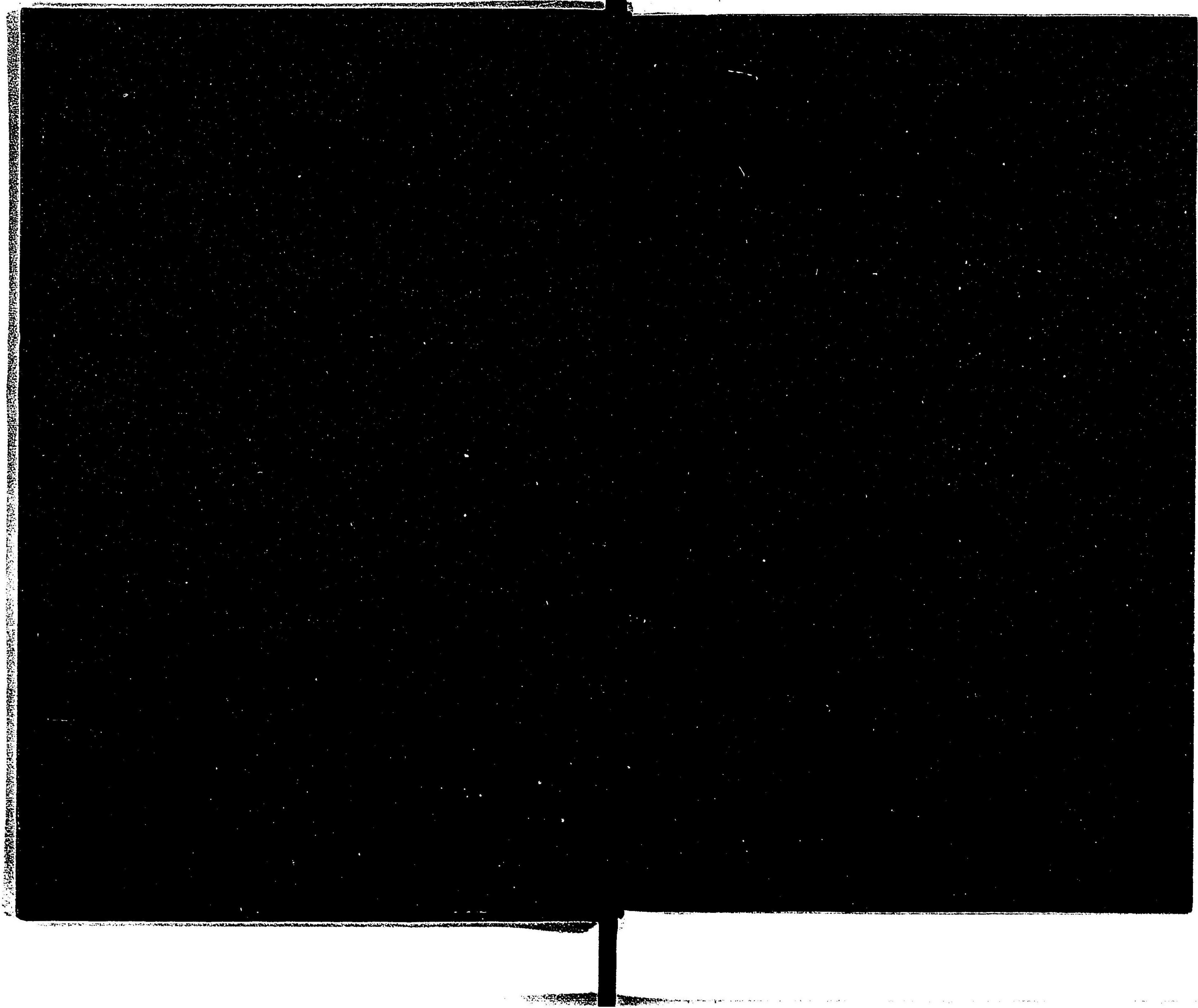
高野斑山氏著  
淨瑠璃史

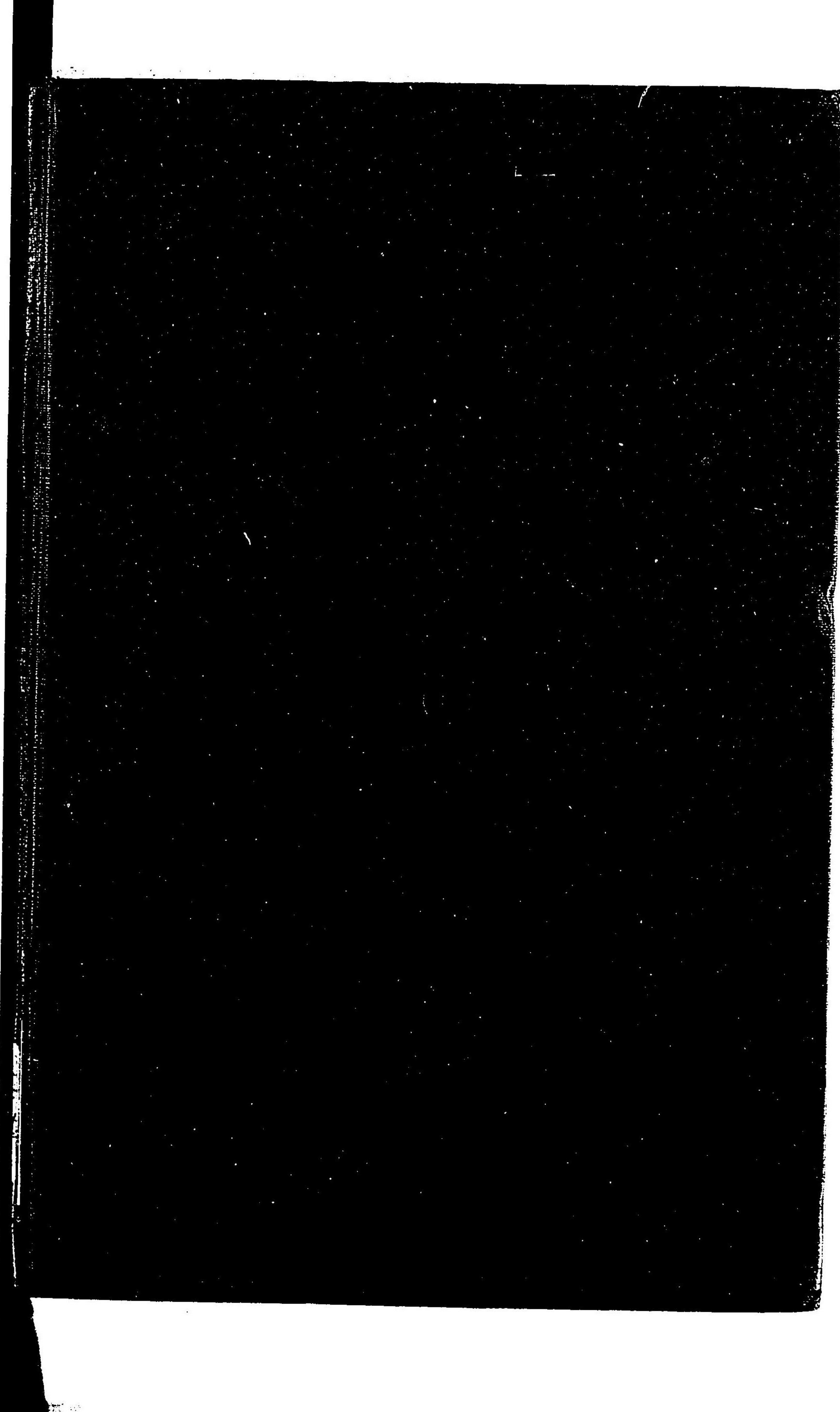
全

定價金壹圓

淨瑠璃並に操略史目次

第一章	創始期
第一節	扇柏子時代
第二節	三絃渡來の時代
第三節	淨雲時代
第二章	漸盛期
第一節	江戸の概況
第二節	京阪の概況
第三章	最盛期
第一節	大阪の盛況……其前半
第二節	京都の概況
第三節	江戸の概況
第四節	大阪の盛況……其後半
第四章	操漸衰期
第一節	大阪の概況
第二節	江戸の概況
第三節	操と歌舞伎との關係
第五章	諸流の起伏





912.4  
Ti238T3t

088302-000-0

912.4-Ti238T3t

近松世話浄瑠璃詳解 第1卷

高野 辰之/著

M40

DBI-0140

